

信長。

なにをいたして居るかなう。

(向うより堀尾茂助吉晴は家來三人をしたがへ、善住坊を細にかけて牽いて出づ。吉晴は手に鐵砲を持つ。)

吉晴。

殿に鐵砲を打ちかけたる曲者は、仰せの通りに仕つてござりまする。

信長。

案の如くおのれであつたな。(善住坊を睨む。)信長はおのれの如き生臭坊主に討たるゝ男でないわ。其奴の持つたる飛道具はそれか。

吉晴。

はあ。(鐵砲を出す。)

信長。

(鐵砲と善住坊とを見くらべながら。)は、おのれ等の猪撃鐵砲は、叡山の猿か兎を撃つに丁度相當ぢや。まことの武士の骨に透るか。はゝゝゝ。(持つたる鐵砲を善住坊の眼さきに投げ出す。)

善住。

凡夫盛んにして神崇らずと、下世話に申すはこのことぢや。日吉山王を頭にいたゞき、佛敵信長をほろぼさんと、一心籠めたる筒先が、一度ならず二度までも狙ひの的をはずれしは、おのれが悪運の盡きざるところぢや。王法佛法ともに廢つた。われゝ生きてなんの望みがあらう。早く切れ、首を切れ。

信長。

云ふまでもないことだ。おのれが王法をかたむけながら却つて信長を罵るは、豕をいだいて臭きを忘るゝの例と知らぬか。やあ、茂助。われに重々の無禮を加へし惡僧、尋常の仕置では飽き足らぬ。瀬田の城内へ牽いてゆき、生きながら土のなかに埋めて、竹鋸で首を挽け。

吉晴。

これは前代未聞のお仕置、あまりと申せば怖ろしいやうに……。

信長。

兎かう申すな。おのれ云ふがまゝに致せばよいのだ。

吉晴。

はあ。では、これよりすぐに引立てませうか。

信長。

いや、待て。やがて火が颯るであらう。其奴は暫くこゝに止め置いて、冥土の土産に山門のほろぶるを見せてやれ。

吉晴。

はあ。

(早鐘又はげしく、坂の上より若き女三人取亂したる姿にて逃げ來る。軍兵等は遮る。)

軍兵。

何者だ、待て、待て。

女。

(口々に叫ぶ。)お助けなされて下さりませ。

(貞正も幕の入口に出づ。)

増補信長記

貞正。女子は放ち遣れとの仰せぢやぞ。  
女。ありがたうござります。

(軍兵等は圍みを解く。三人の女は早々に逃げ去る。おなじく坂の上より六右衛門は流れ矢にあたりし體にて、娘お松に扶けられて出づ。)

お松。父さん、氣をたしかに持つてくだりませ。

(六右衛門は幕の外に倒れる。軍兵等は口々に叫ぶ。)

軍兵。流れ矢に射られたのだ。

又右衛門。(出て見る。お、先刻の漁師か。見れば疵を負うたやうだの。)

信長。呼び入れて薬をあたへよ。

蘭丸。(又右衛門はお松を扶けて、六右衛門を幕の内に連れ込む。六右衛門はまた倒れる。)

殿よりお薬をたまはるぞ。ありがたく頂戴いたせ。

(蘭丸は腰につけたる印籠より薬を取り出して飲ませる。)

六右衛門。(眼をひらく。娘はどこに……。お松、お松……。)

お松。あい、あい。わたしはここに居ります。(顔を差付ける。)

六右衛門。(微に打笑む。お、お松……。無事でゐて呉れたか。(云ひかけて弱る。)

お松。もし、父さん。これ、父さん。傷は淺うござりますぞ。これ……。もし……。

六右衛門。お、お松……。お松……。

(六右衛門はむすめの手を握りて倒れる。お松はわつと泣き伏す。)

信長。流れ矢に急所を射られて、もはや救ふに途もないか。命にかへて愛し兒を助け出したる親

心。おもへば不便なものだ。

お松。いつそわたしがいないならば、こんな最期をさせまいものを……。父さん、堪忍して下さり

ませ。(泣く。)

(忽ちに凄まじき風ふき出づ。)

吉晴。俄に暴風ふき起り、山の木の葉を吹き落すは……。かねて噂に聞き及ぶ、比叡の天狗倒し

とはこれであらうか。

善住。(あざ笑ふ。日吉山王の怒りに觸れて、お山が暴るゝと知らざるか。おのれ等、今に天狗に

掴まれうぞ。

(軍兵等は幕の外にて叫ぶ。)

増補信長記

軍兵。

おゝ、火だ、火だ。燃えるわ、燃えるわ。

(信長は跳り立つて、うしろの山を仰ぎ見る。木の間がくれに火のひかり紅く見ゆ。)

信長。

おゝ、信長の手よりあたへたる一枝の簀が、山門を焼きほろほす薪となつたぞ。折柄のこの大風は、峰より谷へ、谷より峰へと、吹きあげ吹き下して、山一ぱいに燃え擴がるわ。おゝ、おゝ、火はいよ／＼紅うなつた。(幕の外に出る。)

あれ、あの大きい寺に火の雨が降りかゝるわ。あれ、あの高い塔が火の柱となつたわ。(耳をかたむける。)

あれ、聞け、あなたに阿鼻叫喚の聲々が聞ゆるわ。焼けい、焼けい。三千の悪僧ばらをとく／＼く灰にして、山々の谷を埋めよ。(こゝろよげに火を見る。)

(他の人々も息をつめて、火の手をます／＼熾なるを見る。明智光秀向うより走り出で、山のかたを仰きみて驚く。)

光秀。

や、あの火は……。

信長。

(見かへる。)

光秀か。今宵の寄手に加はらぬと申したに、あとより見物にまるつたか。

光秀。

お留守をあづかるとは申したれど、湖水にひ／＼く早鐘の音は、耳を貫き胸にこたへて、餘りの心もとなさに、忍んでこれまで参りました。

信長。

よいところへ参つた。あの火を見い。

光秀。

はあ。

信長。

どうだ、好く燃えるなう。(打笑む。)

光秀。

すべて是れ悪魔の所行。おそろしいと申さうか、淺ましいと申さうか。それがしは見るに忍びませぬ。

信長。

悪魔とも云へ、鬼とも云へ、おれはおれの思ふところを眞直に行ふまでだ。かれらの滅亡は自業自得だ。

光秀。

自業自得といふことを、殿にも御存じでござりますか。(意味ありげに云ふ。)

信長。

おゝ、おのれが犯せる罪に因つて……。

光秀。

おのれが犯せる罪に因つて……。

信長。

地獄の業火に焚かるゝのだ。

善住。

さう云ふおのれも遠からず、生きながら地獄の火に焚かれうぞ。

信長。

えゝ、やかましい。茂助、其奴を引立てい。

吉晴。

はあ。

増補信長記

信長。

六右衛門の死骸は、娘と共に宿許へ送つて遣はせ。

又右衛門。

はあ。

(又右衛門は軍兵等に指圖して、六右衛門の死骸を幕の外へ運び出す。お松も泣く／＼附いてゆく。光秀は黙して嘆息す。)

信長。

光秀。

光秀。

はあ。

信長。

その方には別に役目がある。この叡山に向はぬ代りに、早々に武者ぞろひをして丹波へ向け。西丹波には秀吉を差向けてあるが、かれ一手では暇がかゝる。その方は南丹波へかけ向つて片端から切りしたがへる。

光秀。

はあ。

信長。

南丹波には秦の一家が八上の城に楯籠つてゐる。舊家でもあり、城の構へもよいと聞けば、右から左には埒があくまい。(すこし考へて)あまり暇取つては面倒だ。いかなる手だてをめぐらしても、秦の一家を降参させろ。よいか。

光秀。

かしこまりました。

信長。

(吉晴をみかへる。)ええ、なにを猶豫してゐる。その坊主を早く連れてゆけ。

吉晴。

はあ。

(吉晴は餘儀なく善住坊を引立てる。善住坊は起ち上りて、つか／＼と信長の前にゆき、たがひに睨み合ひながら下のかたへ牽かれてゆく。)

信長。

光秀も坊主ももう一度あの火をみる。はムムムム。

(信長はこゝろよげに火を仰ぎ見る。火はいよく燃えひろがりて、うしろの山は一面に紅くみゆ、早鐘の音。風の音。)

幕

明智光秀

明治四十二年二月作。

大正八年九月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——明智光秀（市川左團次）溝尾庄兵衛（市川壽美藏）進士六郎入道（市川左升）村越三十郎（市川荒次郎）和泉の方（阪東秀調）小笹（市川松蔭）皋月（市川中車）など。

登場人物——明智日向守光秀。溝尾庄兵衛。進士六郎入道。村越三十郎。秦の内室和泉の方。秦の妹小笹。明智の母さつき。ほかに軍兵。侍女。農家の娘など。

(上)

丹波の國、多紀郡八上村の農家を假の陣所にあてたる體。普通の二重屋體にて、藁ぶきの軒に土岐桔梗の紋を染めたる幕を張りたり。庭の上のかたに夕顔棚あり。ゆふがほの蔓は長く這うて軒にかかれり。下のかたには榎の大樹あり。そのうしろには八上の城（秦の秀治兄弟居城）森のあひだに遠く見ゆ。

（七月なかばの申の刻。連日のなが雨わづかに霽れたる時なり。明智の軍兵二人、庭に立つ。農家の娘ひとり、四手綱と箆とを持ちてうづくまる。）

明智光秀

兵 甲。

おゝ。網と笊とを持参したか。

娘。

網はすこしく損じて居りますが、これで御勘辨くださりませ。

兵 乙。

よい、よい。

兵 甲。

(ふたりは網と笊とをうけ取る。)

兵 乙。

其方も知るごとく、先月の中旬このかた、城攻めも一先づお見あはせとあつて、かゝるでも無く、退くでもなく、たゞ遠巻に日を送るは われく一同はなはだ難儀だ。まして此頃のなが雨が朝から夕まで降り籠められて、ほとく退屈いたしたが、幸ひに今朝から雨も小歇みとなつた。城下の川に網を入れて、晩飯のさかなでも漁らうと思ふのだが、すこしは獲物もあらうかな。

娘。

この頃のなが雨で、川は上下ともに濁つて居りますれば、うなぎか鯰か川蝦か、兎にかくに獲物は請合でござります。

兵 甲。

十分の獲物があらば、其方どもにも分配して遣はさうから、川筋のよいところへ案内せい。

兵 乙。

敵の城下とは申しながら、いくさは當時中休みだ。些とも恐いことはないぞ。

二人。

さあ、参れ、まゐれ。

三十郎。

村越三十郎、安土より歸着仕つた。

(奥より進士六郎入道、五十餘歳。直垂にて出づ。)

六 郎。

三十郎どの、戻られたか。をりからの霖雨に道中さだめて難儀の事と察して居つた。先づ兎も角もこれへ、これへ。

三十郎。

(家來を見かへる。其方どもはあれへ退つて休息せい。)

家 來。

はあ。

(家來は會釋して去る。三十郎は草鞋をときて内に入り、下手に坐す。)

六 郎。

さて先づ問ひたきは彼の一條。秦の屋形兄弟の御處置については、殿にも一方ならず胸を痛めておはすが、其後の成行はどうあつたな。

三十郎。

いや、さんくでござる。彼の方々の身については、それがしも詞を盡して、さまくくに嘆き申したが、上様以てのほかの御氣色にて、この上にも強てあらがは、殿までも御勘當と仰せられた。

明智光秀

六郎。して、秦の方々は。

三十郎。申すも無慚……。安土の慈恩寺に押籠めて、一度の御對面をだに許されず、あまつさへ兩

六郎。屋形をはじめ家來十一人、ことごとく切腹申付けられた。

や、切腹……。さりとは無道の詮議……。 (おどろく。)

(奥より明智日向守光秀。この當時は惟任の姓を冒しゐたれど通稱にしたがひて明智とす。帷子に袴

をはき、陣羽織を着し、手づから太刀を持ちてつかくと出づ。)

光秀。三十郎、秦の屋形兄弟は切腹か。

三十郎。残念の儀にござりました。

(光秀は太息をつきて坐す。)

光秀。上様いつもの御氣性とは申しながら、これは又あまりに表裏の御沙汰でないか。敵とはい

へど、本領安堵の約束で降参せられた人々……。ましてそれがために光秀の母が人質とな

つてゐることも、御存じあるべき筈だに……。

三十郎。それはもとより御存じのこと、就いては上様仰せられまするに、羽柴筑前が弓矢を以て、

西丹波一圓をそれからそれからそれへと切平けしこそ、武勇といひ智略と云ひ、あつばれ拔群の功

名とも申すべけれ。光秀がごとき、ことばを設けて秦の兄弟を釣出したるは、弓矢の働き  
といふべからず。ましてわが母親を人質として敵につかはすこと人情に背けり。今さら如  
何やうに嘆き申すとも……。

光秀。待て、待て。なんと云ふ……。この光秀がことばを設けて、秦の兩屋形を釣出したるは、

弓矢の働きでない……。上様、左様に申されたか。

三十郎。それがし面前に於て確と申されました。

六郎。さりとは無念のこと。このたびの和睦は殿がわたくしの計らひでない。何事も上様御指圖

によつて斯くは仕つたに、今更となつて左様に仰せらるゝは、表裏きはまる御沙汰でない

か。察するに例の猿冠者めが殿の功名手柄をそねんで、なにか操つたのではあるまいか。

なにさま筑前めの機關もあらう。さるにても餘りに心外の儀だなう。

光秀。三十郎。(主の氣色をうかがふ。)殿、事已にかやうの破滅と相成りましたる上は、差當つたる一大事、

かの人質のおん方は……。

光秀。母者のことか。それが今の光秀の胸をゑぐる刃だ。母を人質として敵に送ること人情にあ

らずとは申せども、畢竟は上様の御沙汰に因つたることだ。いかなる手だてをめぐらして



も、秦の一家を降参させよ。かれ等神妙に安土へまゐらば、助命は勿論の儀、本領安堵も相違あるべからずと、たしかに仰せられたればこそ、われも大事の母を人質として、兎も角も和平を計らつたのではないか。然るに上様、俄にはじめの誓を破つて、秦の兄弟を御成敗ありしからは、敵も此方の人質をよも安穩には捨て置くまい、其方等はなんと思ふぞ。敵もかゝる時の用心にと取置く人質であれば、この期に及んでなんの容赦がござらう。

三十郎。さればこそ一大事と申すのでござる。  
(光秀は苦悶の胸をいだきて、沈黙多時。やがて左右をみかへる。)

光秀。入道、三十郎。無事に母者を取戻す工夫はないか。

六郎。さればよなう。(三十郎と顔をみあはせる。)

光秀。このこと城内にきこえ渡らば、たちまち母のお身の上だ。こゝ一二三日を過しては、悔ても及ぶまい。光秀も今は思案にあまつた。六郎入道はきこゆる古つはもの、三十郎は眼さきの捷い若者、今この際に肝をくだいて、あるだけの智慧を貸してくれ。頼む、たのむぞ。  
(兩人は思案にあぐみて答へず。)

光秀。いや、いや、二三日の猶豫とは思へども、かう云ふうちにも敵の間者が安土より早々走せ

戻つて、逐一注進せぬともかぎらぬ。左すれば二三日の猶豫もない。明日だ……。いや、今宵……。いや、けふの中にも迫つてゐるぞ。兩人どうだ。手だてはないか、分別は浮ぬか、催促する。)

三十郎。なにを申すにもこれは大事でござる。あの小城ひとつ揉み潰せともあるならば、夜討朝駆又さまぐの分別もござらうが、あの城内から人ひとり無事に取出さうと云うてはなう。たとへば他の手から花を奪ふやうなもので……。無理に奪うてからが、大切の花を散しては詮無いことで。花を傷めずして取る工夫が……。

光秀。あるか、無いか。早く云へ。

六郎。さあ。

光秀。(いよく急いで。)ひと事とて等閑に存するな。光秀のひとりの母は、二晌三晌の後に討るるぞ。そ、それも尋常の御最期とはあるまい。敵も無念の腹いせに、大かたは逆磔刑か吊し斬か。その怖ろしいありさまが眼に見ゆるやうだ。やあ、三十郎。其方も母のある身でないか。光秀が今の苦みを推量せい。

三十郎。萬々御推量申し上げます。さりながら、これは智慧にも力にも能はぬ儀で、若輩のそれ

六郎。がしには、當座の思案とても浮び申さぬ。先づ入道の分別を承はつたる上で……。

光秀。いや、我等とても今この時節、分別あらば包まず申すが、扱その分別と云ふのがなう。

六郎。えい、たがひに譲り合うて、いつまでも同じことを……。日頃はなにかに付けて分別願する兩人が、大事の際に埒もない。この上は其方どもを頼むまい。溝尾を呼べ、庄兵衛をよべ。

(溝尾庄兵衛、三十四五歳、陣羽織、籠手、脇當、草鞋にて夕顔棚のかけに窺ひあたりしが、この時進み出づ。)

庄兵衛。殿。苛うおむづかりでござるな。

光秀。お、庄兵衛。いよく大事と相成つたぞ。

庄兵衛。先づ鎮まられい。日ごろの殿にも似合はぬ、さりとて慌てた……。

光秀。光秀は慌て者だ。現在の親を見殺しにして、鎮まつて居るほどの勇者でない。明智日向守

光秀、五十四萬石の領地、一萬騎の人数を有ちながら、一人の母の命を救ひ得ぬとは、あまりに無念だ。

庄兵衛。いかに無念と仰せられても、時の運なれば是非もござらぬ。たとへば敵にむかふ時、負く

るが無念だと燥つても狂うても、負くる軍には約り負くる。これがすなはち時の運、人間の力の及ばぬところかと存するが……。

光秀。さらば運に任せよと申すか。運を頼むほどなりや人は頼まぬ。其方までが同じやうに、母を見殺しにせよと云ふか。さりとて頼しからぬ心底だ。年ごろ扶持する家來共も、まさか

の時には土人形も同様、あるに甲斐なきものは今知つたぞ。

(光秀は恨むがごとく、憤るがごとく、大息つきて睨み廻してあたりしが、やが衝と起ちて竹縁の端近く出で、城のかたを打仰ぐ。)

光秀。あ、あれを見い。あの城のうちには母が取籠められておはすぞ。あ、それも今暫しのお命だ。主を討たれて血迷うたる敵の奴儂は、さだめて齒がみ足摺りして、無念の刃を先づ誰に向けるか。思うても身の毛がよだつわ。恨みがあらば光秀を呪へ。たとひ人質とは云ひながら、罪なき母に祟らうとは、あまりに無慈悲、あまりに無慚だ。

光秀。や、誰やら呼ぶは……。

(ひとり語り、ひとり罵り、殆ど喪心の體にて、柱に倚りて立つ。秋の蛙の聲、遠くきこゆ。)

六郎。あれは蛙……。蛙が鳴くのでござる。

明智 光秀

光秀。おゝ、蛙か。蛙は雨を呼ぶ……。母は我子と呼んでござらう。救ひを呼べども得参らぬ。

(蛙の聲、近くきこゆ。)

光秀。どう聞き直しても母の聲だが……。しかも次第に近くなるわ。おゝ、それ、母者の蒼白い顔が見えた。

三人。(光秀の指さす方をみる。)

三十郎。あれは軒の夕顔……。人の顔ではござりませぬぞ。

庄兵衛。殿、心をたしかに持たせられい。明智殿ともあるべき大將が、物狂はしき其風情は、近ごろ見苦しいとは思されぬか。

三十郎。まづ舊の座にお直りなされい。

(進んで光秀の袖をひく。光秀は茫然として座にかへる。六郎入道は眼も放たず、軒の夕顔をながめてゐる。)

六郎。これはあながちに殿のひが目とばかりもあるまい。あれ、あの夕顔がおのづと動くは不思議だな。

(軒に近く垂れたる夕顔の實、数あるうちにて唯一つふら〜と動く。)

三十郎。なにさまなう。折柄そよとの風もなきに、あの夕顔ひとつに限つて、さながら魂あるもの、やうに、右へ左へゆらめくは……。

庄兵衛。むゝ。

(庄兵衛起ち上りて折り取れば、蔓をはなれし夕顔は、竹縁の上をおのづと轉けてゆくを、庄兵衛は陣扇にて緊とおさへる。)

庄兵衛。なにさま生きたる物のやうに動くわ。これは抑もいかなる事であらうぞ。

六郎。不思議といへば不思議だが、われ等思案では、その瓜のなかに蛇が棲む。

三十郎。なに、蛇が居る……。

六郎。お身達は安倍の晴明の昔がたりを知らぬか。瓜のなかに蛇の棲むはまゝあることだ。試みに割いてみられい。

(庄兵衛は小柄をぬきて夕顔を割かんとせしが、また思案す。)

庄兵衛。いや、むざとは割くまい。なう、殿。蛇がこの中にかゝまつて、出るにも出られず、死ぬにも死なれず、のた打つて苦み居らば、いかやうの手だてを以て救はるゝな。

(光秀は夕顔をぢつと視る。)

光秀。む、時に取つてよい謎らしいが、今の光秀は心が眩んで兎かうの分別も浮ばぬ。入道、どうだな。

六郎。さればでござる……。われ等はしばらくそのままに捨置いて、蛇のおのづと喰ひ破つて出づるを待ちまする。

庄兵衛。さすがは老功、氣長の意見だが、唯このまゝに捨置いて、瓜が枯れてしまつたら、蛇も諸共にほし殺されうぞ。

三十郎。それがしは唯まつ二つに截割つて、中から蛇をつかみ出さう。

庄兵衛。これは又お身とおほえぬ短氣だ。たゞ眞二つに截ち割つて、蛇を傷けたらなんとする。さらば庄兵衛、其方の意見は。

庄兵衛。兎かうはござらぬ。先この通り……。 (小柄を夕顔に突き立つ。)

光秀。それは救ふのでない。殺すのだ。

庄兵衛。殺すとも一思ひでござる。あるひは干殺され、あるひは傷けられ、いつまでも生殺しの呵責に逢うて、もがき死に死ぬるよりは優しでござらうが……。

六郎。なにさま慈悲の殺生かな。しかし其折があるかなう。

(庄兵衛は夕顔をふたつに割きて、死したる蛇を小柄につらぬきて出す。)

庄兵衛。見られい。蛇は一思ひに極樂往生。所詮無事には救はれぬ蛇ならば、かうして救ふがせめどもの功德ではござるまいか。

光秀。む。 (蛇を見つめてあたりしが、たちまち聲を顔はせる。 ) あ、母も巳年の生れであつた。

(光秀は眼を瞑づ。人々も顔を見あはせて悵然たり。以前の農家の娘、あわたしく走り出づ。)

娘。申上げます。

庄兵衛。何事だ。

娘。いくさは中休みと油断して、御家來衆と城下の川へ、小魚を流りにまゐりましたら、城の中からのやうなものを射出しました。 (紙を結びつけたる矢を出す。)

庄兵衛。お、矢文か。 (うけ取りて文を披見して。 ) 殿に見参の上、申上げたきことあれば、即刻に城外まで御出馬といふ、敵の状でござる。

六郎。なに、敵方より殿に見参とは……。

三十郎。さては早くも彼の事が、敵に洩れたのではあるまいか。

明智光秀

光秀。

もうこれまでだ。なには兎もあれ、すぐにまゐらう。皆もつゞけ。

(光秀粹かに起つて奥に入る。六郎入道も三十郎もつゞいて入る。庄兵衛しづかに起ちあがる。)

庄兵衛。

して、其方と同道した家來どもは……。

娘。

一旦は矢文を射出しましたが、又そのあとから城方の五六人が追つて出て、女は使として

赦して還すが、男は捕へて人質だと皆口々に喚きますので、あまりの怖さにわたくしは、

その矢を手早く拾ひ取つて、一散に走つて戻りましたれば、あとの事は存じませぬ。

庄兵衛。

わが家來どもは何人居つたか。

娘。

わづか二人でござりました。

庄兵衛。

不便や彼等も捕はれたであらう。役にも立たぬ葉武者の二人三人を、人質としてな

らう。敵もよくく執念ぶかい奴等だ。

(小柄を鞘に納めんとして、つらぬきたる蛇を庭に投げ捨つ。)

娘。

あれ。(飛び退く。)

庄兵衛。

お、粗相だ。騒ぐな、さわぐな。

(庄兵衛は奥に入る。ゆふ暮の鐘遠くきこゆ。)

(下)

城の外廓の石垣。老松のあひだに狭間ある白壁、その上に櫓を築けり。八上川は石垣をめぐりて帯のごとくに流れ、岸邊には柳など立つ。おなじ日のゆふ刻。雨雲のあひだより、夕日のひかり洩れたり。

(前に出でたる明智の軍兵甲乙二人、網と箆とを持ちて立つ。城方の軍兵四人は長刀、槍などを持ちて取巻く。)

兵甲。

いくさは中休みと油断させ、不意に打つて出づる卑怯者め。

兵乙。

おめくおのれ等に生擒られうかい。

城兵一。

え、卑怯とはおのれらの主のことだぞ。

同二。

さあ、尋常に降参するか。

同三。

敵對せば容赦はない。

明智光秀

同三。 斬刻んで臈にするぞ。  
兵甲。 何をおのれら……。

（ふたりは網策など投げすて、刀をぬく。城方は四方より打つてかゝる。明智方は衆寡敵せず、隙をみて川に飛び入る。）

城兵一。 や、潔く斬死はせいで。

同二。 隙をうかがつて川へ飛込み。

同三。 水をくゞつて逃失するとは。

同四。 あきれ果てたる蛙武者だ。

四人。 はゝゝゝ。

（城方四人は大笑して去る。向うより明智光秀、引立烏帽子に鉢巻、小具足、陣羽織、毛沓、馬にのりて出づ。つゞいて進士六郎入道、紺糸の鎧、袷袢にて頭をつゝみ、長巻を持つ。村越三十郎、萌葱糸の鎧、白麻の鉢巻、家來大勢を率ゐて出づ。）

三十郎。 城内に物申す。寄手の大將明智日向守光秀、おん招きに因てこれまで参つた。誰かある、お出合ひくだされ。

（櫓の上に秦秀治の内室和泉の方、廿五六歳、下げ髪、引立烏帽子に白絹の鉢巻、薄むらさきの直垂に籠手をつけ、なきななを持ち、秀治の妹小笹、十七八歳、さげ髪に白絹の鉢巻、茶屋辻模様帷子の下に籠手をつけ、おなじく長刀を持ちてあらはる。）

和泉。 明智どの。ようぞまゐられました。敵と味方と隔たれば、見参はけふが初めぞ。これは當城の主、秦の右衛門太夫の妻和泉。

小笹。 おなじく妹小笹。やがては大將のおんに渡るべき首でござります。お見識り置かれくださりませ。

（一々に名乗れば、光秀は鞍より降り立ちて、床几を立てさせる。）

光秀。 方々には長々の籠城、御難儀のほどお察し申す。さりながら、秦と織田との両家已に和平をととのへたる上は、敵味方など申すべき謂れはござらぬ。御用もあらば御心置なく仰せきけられよ。

和泉。 さらば、問ひます。お身の勧めにしたがひて、屋形御兄弟（秀治秀尙兄弟をいふ）はおめおめ降参なされました。しかも現在の母親を人質として、お身がさまぐに申す間、降参おん禮として安土へもまゐられました。それより已に半月あまりの今日と相成つても、未

明智光秀

小笹。

だなんのたよりも聞えませぬは、如何なる次第でござりませう。その返答を確とうけたまはりたさに、これまで招き寄せました。兄はいづこに居りまするか。

和泉。

夫は如何にして居りまするか。それを、まつすぐに申し聞けられませ。

六郎。

(光秀、苦悶の色あらはれて、返答に躊躇す。六郎入道す、み出づ。)  
御疑念御もつともには候へども、秦の屋形御兄弟は先月廿日を以て恙なく安土に御着。織田どの直ちに御対顔あつて、一方ならぬ御満足。ついては日々御款待、さては名所見物の御案内、それ等これ等にて御歸國も自然延引とかうけたまはり申した。なう、三十郎。

三十郎。

それがしは兩屋形を警固して、曩に安土へまかり越し、すなはち今日歸着仕つりたる者。唯今も申上げたることく、織田どのは一方ならぬ御満足……。

(云ひも果てぬに、和泉の方はあざ笑ふ。)

和泉。

おゝ、満足でおはさう。いつはりの手だてを以て兩屋形を釣り出し、見ごとに腹切らせた織田殿は、さだめて御満足でおはさうよ。細作の注進に依つて何も彼も知れてあるに、今

となつても猶白々しう……。お身達もさすがは明智の家來ほどあつて、なか／＼口賢い者どもなう。

小笹。

おんもてなしは劔の舞か、名所見物は三途の川の御案内か。さりとは忝けない御芳志でござりました。織田どのには云ふに及ばず、明智どのにも屹とお禮を申しまするぞ。

和泉。

就てはとりあへず今こゝで、萬分の一の恩報じをせねばなりません。それ、人質をこれへ連れませい。

(侍女二人、はつと答へて、明智の母皁月、六十餘歳、白帷子をきて繩にかゝりしな櫓の上に牽いて出づ。)

光秀。

おゝ、母者……。 (思はず起ちあがる。) 御無事でおはしたか。とは云へ、その淺ましいお姿は……。

皁月。

(光秀は櫓を見あげて、うろ／＼と立迷へば、皁月は顔をあげる。)  
息あるうちに今一目と、神や佛をあさ夕に祈り暮してゐましたが、縁あればこそ最期の對面、母も嬉しう思ひますぞ。

光秀。

かうなるべしと夢にも存するならば、天にも地にもかけがへの無き、大事のおん身をうか

明智光秀

うかと、人質などに送りませうぞ。何事も光秀の不運、光秀のあやまり、重々の不孝はお免しくされ。

阜月。

様子はあられし聞きました。母を人質に送りしは、そちのあやまりで無い、不孝でない。かう成行くも皆さだまる因果ぢや。上様が初めの誓をやぶつて、秦の御兄弟を害せしからは、兩家は舊のかたき同士、翌にも二度の取合となつたるときに、母が敵の手にあつては、子の軍配もおのづと鈍つて、思ひ切つたる軍もなるまい。まして日頃より孝心深きそちの苦み、そちの悲み、思ひやるだに悼ましく、いつそこの母が亡いならば……。

光秀。

お、父母は子を念へども、子は父母を念はずとは、まことに今の光秀がごと。不孝の子をも憎みたまはず、却つて哀れとおほさるゝ母者のおん情、ありがたしとも忝けなしとも、唯々恐れ入ります。

阜月。

わらはも明智光秀の母ぢや。まさかの時には、潔く自害するほどの覺悟はあります。その覺悟を有ちながら、おめくとかうして生きてゐるは、命を惜む卑怯者と思すなよ。今ここで妾が空しくならば、あれ見よ明智光秀は、ひとりの母を功名の餌にして、捨殺しに殺した不孝者よ人非人よと、世の口々に誦はれて、弓矢の名をも汚さうかと、それが無念さ

に死なれませぬぞ。一寸のびれば尋とやら下世話のたとへにも云ふごとく、一日でも半日でも一時でも、生きらるゝだけ生きてゐるうちには、そちが何かの手だてを以て、この母の身をつゝがなく取返さぬともかぎるまい。一旦は人質につかはしても、母さへ無事に取返せば、そちも不孝の名を取らず、弓矢に瑕もつくまいと、子が可愛さに恥を忍び、憂をこらへて生きてゐるは、死ぬにもまさる苦みぞ、子を勵ますために自害した母親は、唐土にも例がある。子を庇ふために命を惜むは、おそらくこの母ひとりであらう。それも今は水の泡で、母もやがては殺されう。ことばを交すもこれを限りぞ。

(明智方の者どもは聞くに堪へず、いつれも頭を低れて控へたり。光秀は身も世もあられず。)

元秀。

かさねくのおん情、胸にこたへ、膽に浸みて、かたじけなしと申さんよりも、空おそろしく勿體なく、光秀前後の度をうしなひて、生きたる心地もござりませぬ。仰せなくとも母者のおん身をいかでか等閑に存すべき。いか様の手だてをめぐらしても助けまらせんと、心は狂ふばかりに飛び立てども、思ふにまかせぬ今の仕儀、いたづらに拳を握り胸を抱いて、あせりに燥り、惱みに惱める苦しさを、なにとぞ御推量くだされい。

阜月。

左もあらうと思へばこそ、母も今まで生きてゐました。さりながら……。

明智光秀



(猶云はんとするを、和泉の方は遮る。)

和泉。はて、いつまでもおなじ縁言。それ、引立てい。  
侍女。はあ。

(侍女は卓月を引立て、入る。光秀いよく堪らす、涙を拂つて土にひざまづく。)

光秀。なう、秦の方々。屋形をたばかりし罪科は我にこそあれ、母は何事をも存ぜぬ者ぞ。光秀憎しとおほしめさば、その長刀にてそれがしの首を刎ね、母の命ばかりはお助け候へ。母に代つて捨つる命、さらしく惜み申すまい。

和泉。

愚や、光秀。お身の命ひとつが所望ならば、我から討てと云はるゝまでもなく、先刻から油断を見すまし、弓鐵砲にて狙撃の仕様もさましくある。それを撃ずしていつまでも、母子ともに生けみ殺しみの苦を見するが、うらみを報ふ手だてと知らぬか。

六郎。

そ、そりや卑怯……。兄夫のかたきならば弓矢の上で尋常の弔ひ軍ともあらばこそ。弱き人質を餌として、執念く崇らうなんどとは、武家の方々にも似合はぬことぞ。

三十郎。

(城方の女子はいよく氣色變つて、聲鋭く叫ぶ。)

小笹。

卑怯などと申すことをおのれらの口より云はるゝか。秦の一家をほろほすに、尋常の弓矢

を取りもせで、たばかりの計略を用ゐたる織田の者共こそ、日本一の卑怯者であらうぞよ。

和泉。

うらみ重なるおのれらに報ゆるは、なみくのことと慊らうか。今より十日のあひだ、人質の母を櫓にひきあげ、十個の指を一日に一つづつ切放して、おのれらに見物させうぞ。それを樂みに待つてお居やれ。

光秀。

や、颯殺しか。なぶり殺し……。

和泉。

お、なぶり殺しにして、亡骸は返上します。お身とても母のかたきを安穩には置くまい。その時こそ尋常に弓矢の勝負。城を枕に討死はかねての覺悟ぞ。

小笹。

秦の家名はこのまゝ斷絶するとも、一家一門が恨のたましひは敵の皮肉に分け入つて、肉を喰ひ、血をすゝり、心までも怪しう狂はして、織田も明智も地獄の火に燬かうぞ。

和泉。

今より幾年の後をみよ。血に染みたるお身の髑髏は、都大路にさらされて、果は瘦犬の餌食とならう。

二人。

おほゝゝゝ。(笑ふ聲もの凄し。)

(光秀、憂ひ、悲み、懼れて色をうしなふ。櫓の上にては心地よげに瞰下して、又云ふ。)

明智 光秀

和泉。その苦しみのさまを見て、すこしは胸も暗れました。さらば、光秀。  
小笹。翌また逢ひませうぞ。

(和泉の方と小笹は奥に入る。)

六郎。美しい女性の紅さいた口から、おそろしい呪ひの聲を聞いた。

三十郎。今より幾年の後には、織田も明智もほろほすと云うたぞ。

(櫓の上に軍兵二人、再び皐月を牽いて出づ。)

軍一。明智どのに申す。けふは人質成敗の初めの日ぢや。

軍二。先づ右の拵指より切落すぞ。しかと御覽あれ。

光秀。(あわて、叫ぶ。)先づ待たれい。さりとはいはれぬ無慈悲ぞ。今暫しの猶豫を……せめて翌まで……。それもかなはずば今宵の初更まで……。

皐月。見苦しや、光秀。さきほど申した通り、生きらるゝだけはと思ふたれど、今となつてはもう叶ひませぬ。無慈悲と恨むはわが身勝手。秦の一家の眼よりみれば、夫のかたき、兄

のかたき、主のかたき、八裂にしてもまだ足るまい。母はなぶり殺しの死恥をみせ、子は不孝の生恥を晒す。それも逃れぬ母子の不運ぢや。敵を恨むよりも味方をうらめ。上様が

はじめの誓を守つて、兩家の和睦をむすび給はゞ、かやうな憂目も見まいものを……。母を殺した當のかたきはこの城内の人々でなく、却つて味方の上様ぢや、織田どのぢや。ようおほえて置け。上様のおはす安土の城は、これよりおそらく東に當らう。母は今より朝な朝なに、日の出づる方を睨んで死ぬるぞ。

(光秀いよく懼れて答へず。)

軍一。いでや成敗。

軍二。覺悟おしやれ。

(一人は皐月をうしろに捻ぢむけて、縛られたる右の手を取り、一人は刀をぬき放す。光秀、戦慄して眼を瞑づ。たちまち銃聲きこゆ。皐月は彈丸にあたりて倒る。軍兵は狼狽して逃げ入る。向うより溝尾庄兵衛、火細筒を持ちて走り出づ。)

六郎。おゝ、溝尾か。

三十郎。庄兵衛どのか。

庄兵衛。さきほどの謎をお忘れあるまい。最後の手だてで生殺しの蛇を救うた。殿に取つては、これ

明智 光秀

六郎。む、十日のあひだに十箇の指を切るといふ、その苦しみに比ふれば、たゞ一思ひの御最期が、却つて優かも知れぬなう。

光秀。(初めて眼をひらく。) 庄兵衛、ようぞ仕つた。この期におよんで光秀が、母を救ふべき一つの手だては、たゞ安らげき御最期をお勧め申すのほかはあるまい。

六郎。さてこの上は城中の者共、そのまゝには捨置かれ申すまい。

三十郎。なにほど堅固に防がうとも、多寡の知れたるこの小城、今宵を過ぎず攻め潰しては如何。勿論のことだ。堀をうづめ、堀を破りて、短兵急に攻めほろほし、敵對する徒はいふに及ばず、女わらべ犬猫の末に至るまで、生あるものは屠り盡して、せめては當座の恨みを霽さう。

光秀。(ゆふ日のひかり消えて、天また陰る。光秀、櫓をみあげて、ひとり言。)

光秀。さるにても光秀は、一人の母を生贄として、おのれが功名をむさほる人非人となつた。これはそも光秀の罪か、敵の罪か、味方の罪か、いつはり多き人の罪か、みだれたる世の罪か。

六郎。ひとは何とも云はゞいへ、味方の我等がたしかに證人。これは殿の罪ではござらぬ。

光秀。しからば敵か。

三十郎。敵とばかりもござるまい。かう成行くは世の罪でござらう。

庄兵衛。いや、味方の罪であらう。先づ第一の根源は上様でないか。

光秀。織田どのか。母もそのやうに申された。(苦悶の眉をひそめる。) 母は安土を睨んで死なれた。

(遠雷の聲きいゆ。)

幕

黑  
船  
話

明治四十三年九月作。

明治四十三年十一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——加津林太郎（市川高麗藏、後の松本幸四郎）船大工平藏（市川左團次）次郎七（市川壽美藏）長作（市川左升）娘お兼（市川莚若、後の松蔦）フーチャンチン（市川荒次郎）など。

登場人物——加津林太郎、船大工平藏。おなじく次郎七、長作、權太。平藏のむすめお兼。粹磯松の茶屋のむすめお島。艦長フーチャンチン。ほかに水兵。捕手など。

(1)

伊豆の國、戸田村の濱街道。

駿河灣を隔て、三保のあたり遠くみゆ。上のかたに葎簀張の茶店ありて、床几をならべたり。安政二年二月下旬の午後。空すこしく陰りて、浪の音高し。

（船大工長作、權太は床几に腰をかけて烟草をのんでゐる。茶屋のむすめお島は茶をくんで出づ。）  
なんだか又沖がすこし暴れて來たやうだな。

長作。むかしからお定まりの二八月とは云ひながら、このごろのやうに時化つゞきも珍しいこと  
權太。

お島。

天城おろしが又ふき出しましたから、沼津通ひの船も止まりませう。

長作。

船と云へばテロシヤの船も、去年の冬から總がかりで、もう大抵出来あがつたさうだが、

權太。

國も違へば船もちがひ、百石や二百石積の和船とは、仕組が大分違つてゐるやうだ。おれたちも商賣だから毛唐人どもは何んなことをするかと内々で眼をつけてゐるが、迂濶

長作。

に傍へも寄せつけねえので、委しいことは判らねえ。どうで彼奴等のする仕事だ。碌なものぢやあるめえよ。

權太。

ちけえねえ、猿の人間似だ。あは、ムムム。

(露國軍艦アイヤナ號の水兵一人、巻烟草を喫ひつゝ出づ。長作は權太に眼くばせして、わざと其行手に立ち塞がる。水兵は避けて行かんとするを、兩人は遮りて突きあたる。)

長作。

やい、やい、なにをしやがるんだ。獸物め。

權太。

毛唐人には眼がねえのか。

(權太は相手の胸倉をつかむ。水兵は拳をかためて打ち拂ふ。)

長作。

や、日本人に手出しをしやあがつたな。うぬ、覺悟しろ。

(兩人は一度に打つてかゝる。水兵は突き且蹴てあらそふうちに、胸にかけたる十字架を落す。向うより加津林太郎、廿七八歳、江戸の武士が町人にすがたを塞せし體。菅笠、道中合羽、脚絆、草鞋にて出で、かくと見るより雙方のあひだに割つて入る。)

加津。

これ、これ、外國人を相手に喧嘩なんぞは見つともない。まあ、止したがよからう。

長作。

毛唐人のくせに大手を振つて、こゝらを歩きまはるのが癪に障るから……。

權太。

以後の見せしめに、ぶつ挫いてやるのさ。なるほど癪にも障るだらうが、相手にうっかり疵でもつけて、奉行所へ掛合ひでも持込まれたら、あとの始末がなかく面倒、おまへ達も無事では済むまい。まあ、今日のところは私に免じて堪忍して遣つてはどうだね。

(しきりに宥むれば、兩人は顔を見あはせる。)

長作。

見ず知らずのお前さんが、さう心配して呉んなさるのに、いつまで強情を張るでもあるめえ。なあ、權太。

權太。

こゝは一番お前さんの顔を立て、このまゝ手を引くとしませうよ。

加津。

いや、呑込みの早い人達だ。さう素直に碎けてくださればわたしも嬉しい。

水兵。 よろしい、よろしい。左様なら……。

(水兵は加津と握手して去る。)

長作。 とんだ獸物にかゝりあつてゐるうちに、もう日が暮れさうだ。お前さん、どうも御厄介に  
なりました。

(加津も笠のうちにて會釋す。)

權太。 ちやお島坊、また明日寄るぜ。

お島。 ありがたうございます。

(長作と權太は上のかたに去る。)

加津。 いや、さうぐさしいことであつた。

(加津は笠をかぶりしまゝ床几に腰をかける。お島は茶をすゝめる。)

お島。 船頭衆でも大工さんでも、濱の人達は氣が暴いのでまことに困ります。

加津。 併しどつちにも怪我が無くつて先づよかつた。時にこの土地も近ごろは大分繁昌するやう  
だね。

お島。 はい。チロシヤの船がまゐりましたから、諸國の人が入り込むので、急に賑かになりました。

加津。 むゝ、諸國の人が入り込むのかえ。

お島。 みんなチロシヤの船を見物にまゐるのでございます。中にはお武家様などが、町人や百姓  
に姿をかへて、様子を探りに来るものもあるさうでございますよ。

加津。 そのチロシヤの船とかいふのは、誰にでも勝手に見せるのかね。

お島。 いゝえ、大勢の異人が劍や鐵砲を持って、船のまはりを取巻いて居りますから、めつたに  
傍へは寄られません。

加津。 それは險難だ。併しそれがために土地が繁昌でなにより結構だね。

お島。 あまり結構でもございません。去年の海嘯も今年の時化も、みんな黒船が來たせるだとか  
申しますから、あんなものは一日も早く追つ攘つてしまひたいと、蔭ながら祈つて居りま  
す。

加津。 追つ攘つても又來るだらうよ。

お島。 え。

加津。

いや、それは常談だ。ときに姐さん、忘れないうちに道中の日記をちよいと附けて置きたいのだが、奥をすこし貸してはくれまいか。

お島。

え、宜しうございます。あの、お客様。まことに相済みませんが、わたくしは水を一杯汲んでまゐりたうございますから、些との間、店をおねがひ申します。

加津。

あゝ、ゆつくり行つて来るが可い。

お島。

はい、直に歸つてまゐります。

(お島は手桶をさげて下のかたに去る。あとを見送りて、加津は始めて笠をぬぎ、上の方を伸びあげりて暫らく覗きながら、手帳や矢立などを把り出して霞簀のうちにいる。上のかたより平蔵のせがれ磯松、十一歳、油入れを持ちて泣きながら出づ。船大工次郎七、廿二三歳、半纏、草履にて、磯松を賑しながら出づ。)

次郎七。

男の癖にいつまでも泣いてゐるもんぢやあねえ。いたづらつ兒はみんな追つ攘つてしまつたから、もう大丈夫だ。泣いちやあいけねえ。泣いちやあ不可ねえ。

(着物の泥などを掃いてやれど、磯松は吸り泣きを止めず。)

次郎七。

なにしろ、こんな小せえ者をつかめえて、いま／＼しい奴等だ。今度また窘めやあがつた

ら、をぢさんが酷い目に逢はして、屹とかたきを取つてやるから、今日はまあ堪忍するが可いや。な、わかつたか。

(しきりに賑し宥むれば、磯松わづかに泣きやむ。向うより平蔵のむすめお兼、十九歳、草履ばきにて足早に出づ。)

お兼。

磯坊はどうしたんだらう。また誰かに窘められて居るんぢやあるまいか。(心配の體にてあゆみ来て。)

次郎七。

おや、お兼さんか。今あすこを通ると、十五六を頭に七八人の餓鬼どもが、可哀さうに斯兒ひとりを取つ掴めえて、なんだか知らねえが窘めてゐる様子だから、相手を追つ攘つて

ここ、まで連れて来たのさ。

お兼。

ぢやあ、又いつもの悪戯つ兒が……。ほんたうに仕様がなないねえ。一體、なんだつてお前を窘めたの。

磯松。

おいらは何にもしないのに、大勢が追つかけて来て、手前は異人の仲間だの、畜生だのと云つて、突きとばしたり、小突いたりして……。

(磯松は泣く。次郎七はお兼と顔を見あはせる。)



次郎七。

それだから云はねえことぢやあねえ。下田にかゝつてゐたヲロシヤの奴等が去年の大海嘯で船をこはされ、命からかくこの濱へ逃げ込んで、新規に二艘組み立てるについては、なにぶんにも人の手が足らず。こゝらの船大工を助けに入りたい、その手間は幾らでも望み次第と、それからそれへと觸れてあるいたが、かう見えても日本人だ、だれが毛唐人なんぞにこき使はれて、大工の御用を勤めるものか、どうとも勝手にするが可いと、仲間一統が高見で見物してゐるうちに、おめえの所の親方は、どう途惑ひをしたものか、自分から進んでヲロシヤに雇はれ、慾と二人連れかは知らねえが、向うの船へ泊り込んで、夜の目も寐ずに働いてゐるとは、あんまりあきれて物が云へねえ。

お兼。

それはお前がいふまでも無く、その時わたしもいろ／＼に止めてはみたが取りあはれず、困つたことだと思ふうちに、悪い噂は高くなり、わづかの金に眼がくれて、異人附合する奴は、船大工仲間の面よごし、以後は決して相手にするなと、近所隣からも嫌はれて、人まじはりも出来ない始末。こんな小さい者までも、外へ出れば窘められて、泣いて歸るのも幾たびか。思へば口惜いやら、悲しいやら……。次郎さん、すこしは察しておくれな。なるほど、お前達に科はねえ。そりやあ私も察してゐるが、坊主が憎けりや袈裟までと、

次郎七。

むかしからも云ふ通りで、おやぢの飛つ沫が娘や子供にもかゝつて來るのは、自然の人情で仕方がねえ……と、まあ諦めるよりほかはねえのさ。

(聞くよりお兼は衝と摺り寄る。)

お兼。

それぢやあ次郎さん、お前もわたしが憎いのかえ。

次郎七。

なに、なに、世間の人は知らねえこと、わつしに限つてそんな不實の料簡は微塵も持たねえ。ヲロシヤの船の一件から親方とは仲違ひ、途中で逢つても口をきかねえくらゐだが、親方は親方、おめえはお前だ。たとひ親方とは弟子師匠の縁を切つても、お前と夫婦の縁は切らねえ。世間の手前、親方の手前、この土地でふたりが添はれずば江戸長崎へ墮落しても、未始終はきつと一緒にならう。わつしも男だ。約束を反故にはしねえから、つまらねえことを案じなさんな。

お兼。

そんならお前はほんたうに……。屹とほんたうに、わたしを見捨てる氣ぢやあないんだね。見捨てるくらゐなら、こんなに諄いことは云はねえ。もう些と辛抱して、おたがひに時節を待つとしようぜ。時にお兼さん、これからどこへ行くんだ。

お兼。

隣村までこの兒を油買ひに遣つたけれど、あんまり歸りが遅いから、家をしめて迎ひに來

磯松。

ねえさん、ごめんよ。油はみんな零してしまつた。

お兼。

可いよ、可いよ。おまへが悪いんぢやあないから……。姉さんは吐りやしないよ。(わが扶にて弟の眼をふいて遣る。)

次郎七。

なぜまた隣村まで……。そんな遠い所まで行かねえでも、近所にも油屋があるぢやねえか。

お兼。

でも、近所の酒屋や油屋ぢやあわたし達に何んにも賣つてくれないんだよ。(涙ぐむ。)

次郎七。

(嘆息する。)む、親方の一件から、近所の人にも憎まれて、酒や油の小買物も出来ねえんだね。そりやあ定めて不自由だらう。よし、よし、その入物をこつちへ出しねえ。

お兼。

え、ぢやあお前買つて来ておくれかえ。

次郎七。

わつしが買ふ分にやあ何處で買はうと仔細はねえ。そこらですぐに買つて来よう。だが、お前達も往來中に突つ立つてもゐられめえ、家を空明きにして置いちやあ第一不用心だ。なにしろ早く歸んなせえ。私があとで竊と届けてあげよう。

お兼。

でも、あんまりお氣の毒だねえ。

次郎七。

まあ、可いからこつちへ出しねえ。(油入れを取る。)

お兼。

ぢやあ、お錢を……。

次郎七。

(帯のあひだより巾着を出せば、次郎七は頭をふる。)

お兼。

なに、錢なんぞは要らねえよ。

次郎七。

(次郎七は油入れを持ちて上のかたに入る。お兼は嬉しげにあとを見送る。)

お兼。

弟子とは云つても、子供のときから一緒に育つて、あれほど仲の好い次郎さんが、お父さんと仲違ひから、このごろ些とも寄附かず。不實な人だと恨んでゐるが、心はやつぱり變らないと見えるねえ。

(茶屋娘お島は手桶をさげて歸り来る。)

お島。

おや、お兼さん。久しく逢ひませんでしたね。

お兼。

このごろは家が忙しいので、ちつとも外へ出ませんが、相變らず御繁昌ですか。

磯松。

姉さん。雨が降つて来さうだから、早く歸らうよ。

お島。

空模様がだん／＼悪くなつて来ましたから、今夜あたり何うしても暴れませうよ。

お兼。

それぢやあ早く歸りませう。

(お兼はお島に會釋してゆきかゝる時、磯松は地に落ちたる彼の十字架をみつけて拾ひ上げる。)

磯松。こんな物が落ちてゐたよ。

お兼。おや、めづらしい。なんだらうね。

(お兼は不思議さうに視る。お島もさしのぞく。)

お島。それは日本の物ぢやあない。あゝ、きつと先刻の異人が、喧嘩のはすみに落して行つたに違ひない。

お兼。なんにしても、落ちてゐるものを拾ふのぢやありません。元のところへ捨て、お置きよ。

磯松。忌だ、いやだ。おいらが見つけたんだもの……。 (物めづらしきに擱んで放さず。)

お島。可いわね、こどもが拾つたんだから……。磯ちやんの玩具に丁度よからう。

磯松。家へ持つて歸つて玩具箱へしまつて置くんた。

お兼。ほんたうにわからずやで困るねえ。ぢやあ、お島さん。

お島。ちつと遊びにお出でなさいよ。

(お兼は磯松の手をひきて向うに去る。)

お島。お父さんの心がけが悪いばかりに、あの子たちも苦勞をして、ほんたうに可哀さうだねえ。

(眞實のうちより加津林太郎は笠を持って出て、お兼等の行方をちつと見送る。)

お島。おや、もうお立ちでございますか。

加津。む。 (鷹揚に云ひしが、俄に心付きたることく) 姐さん、お茶代はこゝへ置くよ。

(加津は町人風に云ふ。お島は禮をいふ。陰りたる日の暮れんとして、いよゝ高き海の音。)

(11)

おなじく戸田村、船大工平藏の宅。二重屋體にて、上のかたに障子屋體あり。正面の上手に三尺の佛壇、その下に押入。つゞいて障子、鼠壁。下手好きところに爐を設けて、自在に織子をかけ、そのそばに粗朶籠を置く。下の方、木戸の外には白桃兩三株。その木の間より海岸および海をみる。おなじ日の夕刻。

(下のかたよりお兼と磯松出で、内に入りてあたりを見まはす。)

お兼。家をあげつ放して出たので、氣が氣ぢやあなかつたが、まあ別に變つたことも無くつてよ

かつた。

磯松。家のなかは眞闇だねえ。

お兼。今に次郎さんが油を買つて来てくれるだらう。けども、あの人とわたしが立話をしてるたことなんぞを、お父さんにも誰にも饒舌るんぢやあないよ。可いかえ。

磯松。あい。

お兼。お父さんも月末には一度歸ると云ひなすつたから、ひよつとすると、今夜あたりは歸つて來なさるかも知れないよ。まあ、なにしろお湯でも沸して置かうか。

(お兼は爐にむかつて粗朶など焼べる。時の鐘きこゆ。向うより主人の平藏。四十四五歳、仕事着の上に古びたる黒羅紗の外套をまとひ、草履ばきにて出づ。)

平藏。今始まつたことでもねえが、小一月もつゝいて歸らねえから、お兼も磯松もさぞ待つてるだらう。おい、今歸つたよ。

(門をあくれば、磯松は駈寄つて取りつく。)

磯松。お父さん。おまへの歸るのを待つてるたよ。

平藏。いつも云ふ通り、なにぶん急ぎ仕事だから、都合によつては半月も一月も泊り込みで、夜

の目も寐ずに働かにやあならねえのだ。おれが留守のあひだは、姉さんに世話を焼かしちやあ不可ねえぞ。

お兼。いゝえ、おとなしくお使いや何かしてくれませよ。

平藏。おとなしくお使いをするか。そりやあ豪勢だ。時にもう日が暮れるといふのに、なぜ燈火をつけねえ。家の中はまるで手探りだぜ。

(お兼はうつむきて答へず。平藏は訝しげに催促する。)

平藏。おい、なにをほんやりしてゐるのだ。早く行燈を持出さねえか。

磯松。行燈はそこにあるけれども。油かないよ。

平藏。なに、油がねえ。そんならなぜ書間のうちに買ひ込んで置かねえのだ。

お兼。買ふのは知つてゐるけれど、近所では賣つてくれず、この兒を遠くへ買ひにやれば、途でいぢめられて泣いて歸る。ほんたうに仕様がないうですよ。

平藏。おれが黒船へ仕事にゆくので、近所の者から憎まれて、困るといふことは豫々聞いてゐたが、眞逆にそれほどとも思はなかつた。世間には料簡のせまい奴等が多いな。なにしろ、斯うだん／＼に闇くなつては仕方がねえ、景氣よく粗朶でも焼べる。

お兼。

あい。

(お兼は爐に澤山の粗朶をくべる。火の光はつと起ちて明るくなる。)

お兼。

お前、夕御膳は。

平藏。

いや、飯はまだ喰ひたくねえ。湯でも茶でも可いから一杯くれ。

磯松。

あい。

(磯松は寄つて、罐子の湯を湯呑みに汲みて持ち來る時、袂より彼の十字架を落す。)

平藏。

なんだ、その光る物は……

磯松。

さつき途で拾つたんだ。(十字架をみせる。)

平藏。

(火のひかりに透かしみる。)むむ、これは十字架だな。

磯松。

十字架つて、なんだえ。

平藏。

早くいへば切支丹宗のしるしで、十字架とも云ふのだ。

お兼。

え、切支丹……まあ、飛んでもない。切支丹宗にきびしい御法度、そんなものを持つて

るて、どんなかゝり合ひにならうも知れない。早く外へ持つて行つて、人の見ないところへ捨て、お出でよ。

平藏。

いや、勿體ねえ。むやみに捨てちやあ不可ねえ。

お兼。

え、勿體ないとは……

平藏。

實はおれもこの通り持つてゐる。

(頸にかけたる十字架を示せば、お兼はおどろきて措寄る。)

お兼。

もし、お父さん。御禁制の切支丹に、なんでお前は……

平藏。

これ、靜にしろ。

(お兼はこゝろづきて門をうかゞひ、又忙がはしく立戻る。)

お兼。

一體それはどういふわけで……

平藏。

なにを隠さう。この平藏は日本のために切支丹宗門に這入つたのだ。おまへ達も知つての

通り、アメリカの黒船が浦賀へ來たをはじめとして、諸國の船がたびく來るので、世間

は次第にさわがしく、何時異國と軍がはじまるかも知れねえと、内々用心してゐる位。そ

こで俺の見たところぢやあ、なるほど日本人は勇いに相違ねえが、船のことぢやあまだま

だ異國の足下にも追つ付かねえ。なんでも敵に負けねえやうな、立派な大船を造るにかぎ

ると、ふだんから工夫してゐるうちに、丁度ヲロシヤの黒船が下田の海嘯で破損して、こ

こで修覆をすると云ふのは、こつちに取つては天のあたへで、たとひ世間の奴等がなんと云はうとも、自分から進んで仕事に雇はれて、向うの船のこしらへ方を一から十まで見きはめる積りだ。

(加津林太郎忍び来りて門にたゝすむ。上のかたの障子を細目にあけて、次郎七も窺ふ。)

お兼。  
平藏。

それは薄々聞いてもりましたが、船のことは兎も角も、お前はなぜ切支丹の仲間入りを。さあ、そこだ。船の外まはりや帆檣などを造るには、別になんの仔細もねえが、さて肝腎の急所々々は少しもおれに手を出させず、向うの鍛冶職や船大工が一切ひき受けて遣つてゐる。それぢやあ折角の望みも水の泡だ。どうぞおれにも教へてくれと、無理に口説いて頼んだところが、船を造るには色々むづかしい秘傳がある。それはむやみに他國の者には洩されぬ。もし達ておほえたいと云ふならば、自分達とおなじ宗旨になれ。たとひ國は違つても、おなじ宗旨の者は兄弟同様と視て教へて遣るまいものでもない、退引きならねえ口上に、おれも一時は途方にくれたが、とゞのつまりは度胸を据ゑて、先祖代々の宗旨を變へた。そのおかけで黒船のこしらへ方は、なにから何まで肚に這入つて、何千石の大船でも俺あ立派に仕あけてみせる。自慢ぢやあねえが、日本中にこれを知つてゐるの

お兼。

は俺ひとりだ。

お前がそれほどに辛苦して、異國にまけない大船を造るといふのは嬉しいが、若もこれがお上へ知れたら、お前は どうする積りだえ。

平藏。

どうすると云つて覺悟の前、立派にお仕置を受ける氣だ。

磯松。

お父さん、お仕置なんぞになつちやあ忘だよ。

(お兼も泣く。奥の障子をあけて、次郎七出づ。)

次郎七。

親方、どうぞ堪忍しておくんませえ。實はこのお兼さんにたのまれて、油を買つて裏口から這入り込み、だん／＼聞けば今の話に、わつしも實に感心しました。さういふ深い料簡のある事とは些とも知らず、毛唐人にこき使はれる腰ぬけ野郎と、弟子師匠の縁を切り、無沙汰で過したのは私のあやまり。その罪ほろほしには萬一の時、切支丹に這入つたのは次郎七でございますと、その十字架とかいふものを證據にして、わつしが立派に名乗つて出るから、かならず心配しなざるな。

平藏。

これ、これ、なにを云ふのだ。演劇や淨瑠璃ぢやああるめえし、他人の身代りなんぞが今時通用するものか。よし又それが出来るにしても、俺あ身代りなんぞを頼みたくはねえ。

いつそ殺されりやあ本望だ。

(お兼はあきれて父の顔を見る。)

次郎七。

だが、親方。ふだんとは事が違ふだらうぜ。お前は黒船のこしらへ方を残らず見おほえ、聞き覺えた、日本で一人といふ大事の人だ。それを殺してしまつては、國のためにも何にもなるめえ。わつしなんぞは假令死なうが生きようが、世間に障りのねえ人間、小の蟲を殺して大の蟲を助けるとは此事だ。

お兼。

次郎さん。お前までがそんなことを……。

次郎七。

え、好いつてことよ。わつしだつて好んでお仕置を受けたくはねえが、親方にやあ代へられねえ。いよく事がばれた曉には、どうぞわつしを切支丹にして、親方は助かる工夫をしておくんせえ。

平藏。

それほどに云つてくれるのは嬉しいが、あすが日おれが死んでも困ることはねえ。黒船のこしらへ方は誰にでもわかるやうに、ちやんと圖まで引いて置いたから、その心得のある者が目を通せば、きつと判るに相違ねえ。まあ、安心するが可いや。

(この時、加津林太郎は門をあける。)

加津。

頼む。

(これにて皆おどろき、磯松は袂に十字架を隠し、お兼はあわて、爐の火を打ち消す。家内再び闇し。)

平藏。

どなたでございます。

加津。

江戸の侍、加津林太郎と申す者だ。

(皆々いよく驚く。平藏は騒がず。)

平藏。

なんの御用かは存じませんが、どうぞお通り下さいまし。

加津。

む。

(加津は草鞋を解き、さぐり足にて内に入る。お兼は行燈を點さうかと指さす。次郎七は「まあ、待て」と制す。)

平藏。

あなたはお江戸からお出でなさいましたか。

加津。

いかにも。(うなづく。)小身ながら將軍家の祿を頂戴いたす者だが、今夕不意に尋ねてまるつたは他でも無い。すこしく聞き訊きたい儀があるのだ。

平藏。

では、あなたは何事も……。

加津。む、聞いてわざ／＼尋ねてまゐつた。

平藏。おたづねと仰しやるのは、ヲロシヤの船の一件でございませうな。

加津。察しの通り。して、その船の造り方もたしかに習ひおほえたか。

平藏。親代々の船大工、和船を叩きあける仕事ならば、腕に覚えもございませうが、西洋型の黒船

は近ごろ始めて見たばかりで、どこから手をつけて可いのやら、まるで初めは見當も付きませなんだが、去年から足かけ四月のあひだ、夜晝働いたおかけには、どうやら斯うやら筋道だけは呑み込みました。

加津。それは手柄だ。彼の寛永の鎖國以來、大船の製造も長く世に絶えたれば、船に最も大切な肋骨の製造もあきらかならず、たゞ經驗と熟練とを頼むのみであれば、當時わが國で製造する大船は、形こそ西洋を學んで居れど、内部はやはり昔のまゝだ。したがつて船も弱く、船足もおそく、且は吃水の深い浅いもわきまへねば、順風のとときは兎もあれ、浪風すこしく暴き節には、たちまち船體動揺して、やゝもすれば顛覆のおそれがある。現に昨年五月、上には相州浦賀において鳳凰丸を造り、また薩州藩にても昌平丸を造つたが、西洋諸國の軍艦にくらべては、まだ／＼足下へも寄付かれまいなう。

平藏。仰せの通りでございます。扱その實地に就てみますれば、わたくしどもの夢にも知らぬことばかりで、なるほど斯ういふ船があれば、異國は海の軍が上手になる筈だと、實に舌を

まきました。

加津。お、さうであらう。わしもその工事の模様を探りたさに、町人に姿をかへて、わざ／＼

當地へまかり越したが、用心嚴重で近寄られず、實は當惑いたして居つたところだ。して、其方の手を假らば、いかなる船でも出来ると云ふか。

平藏。いえ、わたくしの手をかりずとも、そのこしらへ方さへ心得て居りますれば、誰にでも屹と出来るのでございます。

加津。それを承知していよく安堵いたしました。世のあざけりを省みず、あまつさへ御禁制の切支

丹宗門に歸依し、わが一命を的にして、造船術の祕密をさぐり得たるは、世にたのもしき其方の志。わが日本國の大人と云ふべきものだ。公儀にてはこのたび石川島に造船所をひらき、新に幾艘の大船を造らんとする時にあたつて、其方ごとき職人を見出したるは意外の幸ひであつた。して、ヲロシヤの軍艦はいつ頃まつたく出来いたすな。

平藏。もう荒方は出来いたして、今は外まはりを塗るだけになつて居ります。



加津。それはいよ／＼好都合だ。手前も兩三日中には發足いたす心得であれば、その節同道して江戸表へまるれ。どうだな。

(お兼と次郎七等は喜びてゐざり出づ。)

次郎七。では、切支丹のお咎めもなく、公儀お抱への職人となれますか。

加津。切支丹は重き罪科、餘人なれば赦すまじきところなれど、上の御用に相立つべき者を、むざ／＼失ふは本意でない。今より改宗するならば、手前よりその事情を申立て、上のお慈悲を願うてつかはずぞ。

平藏。折角の思召ではございませが、どうも其儀……。

加津。なに、宗旨を變へるは不承知か。

平藏。へい、神様に對して相濟みません。

次郎七。おい、おい、親方。なにを云ふのだ。お前だつて心から有難くつて、あんな宗旨になつた

お兼。わけぢやああるめえ。江戸のお武家様が御深切におつしやつて下さるのは何より幸ひだ。

平藏。切支丹なんぞは今夜かぎりで止めにして、わたし達にも安心さして下さいよ。

平藏。なるほど、次郎七のいふ通り、おれがあゝの宗旨に這入つたのは一時の方便で、はじめは別

にありがたいとも尊いとも思はなかつたが、だん／＼その教を聞くにつけて、たとへば天の雨露がおのづと草木に沁みるやうに、ありがたいのが身にしみ渡つた。

次郎七。

平藏。

これほどありがたい尊い教を、むかしから邪宗だの何のと云ひ觸して、御法度にする趣意がわからねえ。まゝになるなら、江戸の公方様にお目にかゝつて、切支丹宗のありがたいと云ふわけを、委しく聞かして上げてえくらるだ。

(皆々あきれて、顔を見あはせる。)

お兼。それぢやあお前はどうかあつても、切支丹の宗旨をかへずに、縛られてお仕置になる氣かえ。

平藏。むゝ。死ぬも生きるも神様の御指圖次第、磔刑でも獄門でも些とも恐れることはねえ。た

とひ肉體は八裂きにされても、たましひは天に昇れるのだ。

加津。(うなづく。)左ほどに堅き信仰を持つからは、改宗を強ふるも無用であらう。併し平藏、

はじめ西洋造船の術を傳へ受けながら、教のために我身を生贄にしては、折角苦心の甲斐もあるまいが。

平藏。それは御心配なさいませ。黒船の形から内外の組立方を、一々明細に記しましたる繪圖

面。また一冊は材木の組方から、ターといふ油の塗り方まで、残らず認めました秘密の傳授、この二品さへございませれば、私なぞが居らずともかならず立派に出来ませう。

して、その品々を誰にゆづるな。

加津。

さあ、あなたに差上げたい所でございますが、これに居ります次郎七はわたくしの弟子分、あれに譲つてやりたうございます。(次郎七を見かへる。)今云つた二品はお前にゆづるから、おれの代りに江戸へ出て、お上の御用を首尾よく勤め、一廉の棟梁になつてくれ。それから頼むのはお兼と磯松……。ましてお兼は女のことだ、お前のほかに頼りはねえ。江戸は名に負ふ公方様のお膝下で、見るもの聞くもの萬事萬端、この田舎とは違ふだらうが、たとひお江戸の水にしみても、どうぞお兼は見捨てゝくれるな。娘もまた其通り、自分の亭主を大事にして、かならず愛想を盡されるな。半襟や櫛かんざしの流行り廢り、髪結様にも氣をつけて、江戸の女に笑はれるな。可いか、わかつたか。

次郎七。

なにも彼も知つての上のおなさは、なんともお禮の云ひやうがねえ。お兼さんと磯坊は私がたしかに引受けた。

お兼。

重々ありがたいお父さんの御意見は、一生決して忘れません。

平藏。

さうきまれば、俺も案じることはねえ。思ひ立つ日が吉日だ。今こゝてその二品を譲らうが、なにしろ暗くつちやあ仕様がねえな。

次郎七。

いえ、油はわつしが買つて来た。

平藏。

それぢやあ早く燈火をつけろ。

お兼。

あい。

(お兼は起つて奥に探り入る。雨の音きこゆ。)

磯松。

また雨が降つて来た。

次郎七。

二三日催してゐたのだから、どうでも一度は暴れるだらうよ。

(お兼は奥よりあわたとしく走り出す。)

お兼。

お父さん。大變……。

平藏。

さうくしい。どうしたのだ。

お兼。

油を取りに行つたら、臺所のかげに誰か隠れてゐて、わたしを見ると慌て、外へ……。

次郎七。

はて、誰だらうな。立聞きなんぞする奴は……。

お兼。

暗くつてよくは分らなかつたが、うしろ姿は長作か權太のやうでしたよ。

次郎七。ほかのことは兎もかくも、切支丹の一件をうつかり饒舌られちやあ取返しが付かねえ、野郎、取つ捉めえて……。

(あわて、起たんとするを平藏は制す。)

平藏。まあ、うつちやつて置け。あいつ等が饒舌らねえでも、おそかれ早かれ知れることだ。船もあの方出来たから、おれももう用のねえ體、卑怯に包み隠さうよりも、自分の方から尋常に名乗つて出ようよ。

加津。

いや、名乗つて出ずとも、ほかに工夫があらう。命を輕んずるのみが勇者でない。一旦はこの地を逃れて、チロシヤの船に身をかくせ。今日こそ異教は禁制なれ、世界萬國と交通しゆく相成らば、信仰はめいくの自由、切支丹宗門とても公けに許さるゝ時節がないともかぎらぬ。先づそれまでは外國船にかくまはれて、當座の難儀を避るがよいぞ。

次郎七。

なるほど、それはよい御思案。おい、親方。あなたも折角あゝ仰しやるもんだから、その御指圖にしたがつたら何うだね。

お兼。

お上の手にかゝらないうちに、些とも早くこゝを逃けてくださいよ。

平藏。

(思案して。)さすがは加津様の御意見、よく分りました。チロシヤの船へかけ込んで、わけ

を話して頼みましたら、かくまつて呉れるに相違ございません。では、一旦は逃げませうか。

次郎七。

そんなら些とも早いのが可い。

お兼。

あい。燈火はすぐに點けますよ。

(お兼は再び奥に入る。雨の音いよゝゝ急なり。)

次郎七。

親方、支度は可いかえ。意地わるく降出したぜ。

平藏。

なに、別に支度は要らねえ。それでは加津様、どうかこの次郎七を幾重にも……。

加津。

萬事は手前がひき受けた。決して案じるには及ばぬぞ。

(お兼は奥より油入れを持って出で、行燈に油をさせば、次郎七は火を點けてまん中に直す。家内始めて明るし。)

平藏。

おゝ。闇い家中が明るくなつた。

加津。

闇い日本も明るくならう。

(兩人は顔を見あはせて打笑む。)

お兼。

さうなる時にはお父さんも、西洋の造船をおほえた元祖。

磯松。

人がみんな褒めるだらう。

平藏。

いや、おれはまあ何うでも可い。お前達こそ立派なものになつて、世間の人に褒められてくれ。邪魔の這入らねえうちに、あの二品をわたして置かうか。

(平藏は起つて押入れより古文庫を持ち來り、その中より一冊の帳面と船の圖をひきたる紙幾枚をさぐり出す。)

平藏。

これさへあれば、一々講釋するにも及ばねえが、念のために急所急所を教へて置くから忘れるな。

磯松。

(次郎七の前に圖をひろげてお兼は行燈の火をかき立て、加津と次郎七は摺寄つて一心に圖をのぞき視る。この時、捕手數人忍び出で、門に立ちて内をうかゞふ。磯松は外を透しみて叫ぶ。)

捕手。

やあ、誰か表に……。  
(人々おどろきて屹と見かへる時、先に立ちたる一人が聲をかける。)

平藏、御用だ。  
(十手を閃かして躍り込めば、加津は遮りて、これを投げ退ける。かくと見るより次郎七はあわて、彼の帳面と圖をかき集める。お兼と磯松は門を閉め切りて捕手を入れじと内よりおさへる。平藏は)

行燈を吹き消して家の前後をうかゞふ。内は再び闇となりて、外は雨の音、風の音、捕手が御用、御用と轟く聲。)

(III)

戸田の海岸。所々に磯巖聳えて、松の古木など生ひたり。風雨暴れて海黒し。

(長作はあたりをうかゞひながら出づ。)

長作。

さつさ平藏の裏口を通ると、小耳に這入つた切支丹の一件……こいつはうまい錢儲けとすぐに訴人に出かけたが、肝腎の相手を逃しちやあ物にならねえ。早くありかを突き當ててえものだ。

(捕手つゞいて出づ。)

捕手。

長作、どうだな。

長作。

なんでもこつちへ來たに相違ねえんですが……。まあ念のために一廻りして見ませうよ。

次郎七。

(長作も捕手も上のかたに去る。次郎七は蓑笠にて走り出づ。)  
生憎ひどい風雨になつて来やあがつた。だが、親方を逃すには却つて都合が可いかも知れねえ。どうか巧く落して遣りてえものだが……。

(次郎七は前後をみまはす。つゞいてお兼は素足にて裳を端折り、番傘をかたむけて走り出づ。次郎七は透してみる。)

次郎七。

おい、お兼さんぢやあねえか。

お兼。

次郎さんかえ。して、お父さんは……。

次郎七。

裏の垣根を破つて抜け出すまでは見とゞけたが、それから先は判らねえ。

お兼。

船まで無事にゆき着いたらうか。

次郎七。

船と云つても仕事場はすぐそこだが……、念のために行つて訊いてみようよ。

(兩人は心配しつゝ上のかたに行かんとす。風雨にまじりて人聲きこゆ。次郎七は行手をうかどひて立止まる。)

次郎七。

や、もう先まはりをして、あつちからも大勢来るやうだ。

お兼。

いけないねえ。もし見つかると面倒だから、路を變へて行かうぢやあないか。

次郎七。

む。なにを云ふにもこの風雨で、西も東も方角が立たねえ。

(兩人は引返して下のかたに入る。向うより平藏は外套をつけ、竹の子笠をかぶり、風雨を買して出づ。)

平藏。

思ひのほか早く手が廻つた様子だ。これぢやあ無事に船まで行かれりやあ可いが……。なにしろ、降るわ、吹くわ。おそろしい夜だな、だが、いくらでも吹くが可い。降るが可い。追手の眼をくゞるには、この風雨が天のたすけだ。平藏には神様の救ひがあるのだ。

(上のかたより長作を先に、捕手数人出づ。)

長作。

(透しみる。)  
おい、誰だ。

(平藏は答へず、摺りぬけて行かんとす。)

捕手。

それ、逃すな。

(捕手は追取りまく。平藏逃れんとして闇中の亂闘。長作さぐり寄つて組みつけば、平藏はふところより洋刀を取り出して切り拂はんとし、長作も小刀をぬきて争ひ、双方相刺して倒る。加津林太郎走り出で、かくと見るより懐中のヒストルを取り出し、空に向つて連發す。捕手はこれにおどろきて皆逃げ去る。)

加津、

平藏、平藏。無事か。

加津、

(平藏、平藏。加津は聲をしろべに探り寄る。)

加津、

これ、平藏。怪我でもいたしたか。

加津、

(平藏答へず、たゞ唸くのみ。風雨わづかに止みて雲の絶え間より薄月の影あらはる。アイヤナ號の艦長フーチャンチンは銃をたづさへたる水兵大勢を率ゐて出づ。)

艦長、

ビストルの音、なんですか。

加津、

いや、捕手を嚇すために撃つたので……、決して御心配には及ばぬ。(云ひつゝ倒れたる平藏を月明りに見て)むむ、手を負うたか。

次郎七、

(加津は平藏を扶け起す。艦長等もおどろきて立寄る。下のかたより次郎七とお兼走り出づ。)

お兼、

や、親方、やられたか。お前の安否を氣づかつて、そこらを探してあるくうちに、暗やみ

次郎七、

でだしぬけに鐵砲の音がきこえたから、驚いてこつちへ駆け付けたが、こりやあ飛んでも

お兼、

ねえことになつたな。

次郎七、

お父さん、しつかりして下さいよ。

お兼、

おい、親方、親方。

次郎七、

お父さん、しつかりして下さいよ。

(呼び活ければ、平藏わづかに首肯く。加津はあたりを視て、長作の死體に眼をつける。)

加津、

そこにも人が倒れてゐるな。

次郎七、

え、や、こいつは長作……。手に血だらけの刃物を持つてゐるやあがる。さては這奴が切支

お兼、

丹の訴人をした上に、親方をやつつけたに相違ねえ。

お兼、

ほんたうに憎らしい奴だねえ。(泣く。)

艦長、

(フーチャンチン立寄りて、先づ平藏の傷をあらため、更に長作をあらためて、悼ましげに嘆息す。)

加津、

どちらも傷はこゝです。(わが心臓を指さし)もう不可ません。この二人喧嘩しましたか。

艦長、

いや、喧嘩ではござらぬ。御存じの通り、この平藏は昨年来貴國の船に雇はれてゐるうち

加津、

に、何人かの勧めにしたがつて、切支丹宗門に歸依いたした。わが日本國において、彼の

艦長、

宗門はきびしき禁制。それがために捕手にかこまれ、かやうな最期を遂げたのでござる。

加津、

あ、判りました。わかりました。平藏は切支丹宗徒として殺されましたか。

艦長、

(悵然として部下をかへりみれば、水兵等は黙して頭を俛る。)

加津、

しかし悲むことありません。あなたは國の爲、教のために命をさへけました。あなたは愛

加津、

國者であります。殉教者であります。靈魂はかならず神様に救はれます。疑うてはなりま

せんぞ。

(平藏の耳に口をよせて云ふ。加津も差寄つて云ふ。)

加津。

平藏。無事に落したいと存じたが、残念ながらもう叶はぬ。しかし死んでも憾みはあるまい。わが日本人は安政二年、豆州戸田に於て、はじめて洋式の造船術を知ると、海の歴史に残るであらうぞ。

(平藏は微笑みてうなづく。)

艦長。

(形をあらため。尊い人のために最後の祈禱をします。)

(艦長はわが頸にかけたる十字架を把りて、平藏の額にかさす。平藏は次郎七とお兼とに扶けられつゝ胸に手を組む。)

平藏。

さんたまりあ……。(念じつゝ瞑す。)

(フーチヤンチン黙禱し、水兵等は肅然として弔禮をおこなふ。やがて軍樂は、『哀の極』を奏すれば、兵は二列にわかれて銃剣をさし上げ、二人の兵は擔架に平藏の死體をのせて、そのあひだを運び去る。月のひかり蒼く、浪の音悲し。)

—幕—

武田信玄

大正元年十一月作。

大正二年一月。本郷座初演。

初演當時の主なる役割——武田信玄（市川左團次）武田勝頼（市川壽美藏）諏訪の方（阪東秀調）黒姫（市川松蔭）萩原彌三郎（中村又五郎）など。

登場人物

武田信玄。武田四郎勝頼。信玄の室諏訪の方。諏訪の方の妹黒姫。萩原彌三郎。甘利左衛門尉。内藤修理正。小山田將監。秋山伯耆守。向井孫次郎。ほかに侍女。小姓。家臣など。

(1)

永祿五年、正月十一日の午後。

甲州の躰躰ヶ崎、武田屋形の庭内。中央に四阿あり。あづまやに沿うたる上のかたに葡萄棚ありて、時は春なれば蔓のみ長く這へり。棚の下より奥へかけて水屋あり。下のかたには梅の古木ありて、白き花をつけたり。木の間より雪をいたゞける富士近くみゆ。

（萩原彌三郎、廿歳、小姓あがりの美男、社村、草履にて出て來り、水屋の鏡を檢査す。あとより侍

武田信玄



女甲乙丙の三人うかゞひ出づ。

彌三郎。お、お侍女衆か。なんぞこゝらに御用でもござるか。

侍女甲。いえ、いえ、ほかに用はなけれども、お前のあとを見えがくれに附けて來ました。

彌三郎。なに、見えがくれに附けて來たとは。

侍女乙。おまへは甲州第一の美男と、御屋形の内外にも隠れのないお方ぢや。

侍女丙。どこで何のやうな女子と、内證話などして居られうも知れぬと、わたし等は法界格氣で

いつもお前のあとをつけて居ります。

彌三郎。それは油断のならぬことでもござるな。

(彌三郎笑ふ。侍女どもは摺寄つて云ふ。)

侍女甲。油断がならぬといへば彌三郎殿、お前はこのあひだも黒姫様と、この四阿のかけに隠れて、

なにかひそくと面白さうに話してござつたが、あれはどうしたことでござりますな。

彌三郎。黒姫様と密談などとは近頃はなはだ迷惑に存する。手前がいつもの通り、水屋を見まはり

に參つたところへ、お姫様がお出でなされて、歌物語などなされて居つたのでござる。

侍女乙。歌のお話は、おほかた戀歌でござりましたらうな。

侍女丙。お羨ましいことでもござります。

(葡萄棚のかけより武田四郎勝頼、これも廿歳の血氣の若大將、出て來りてこの問答を聴く。)

彌三郎。又してもそのやうな埒もないことを……。萬一御屋形や奥方のお耳に入らば、手前は兎も

あれ、お姫さまの御迷惑とも相成る儀でござらうに……。ちと嗜んでください。

侍女甲。御屋形や奥方よりも、もし此事が四郎様のお耳にきこえたら……。なう、皆様。

侍女乙。どのやうに御機嫌を損じやうも知れませぬ。

(彌三郎黙して思案す。)

侍女丙。それ、御覽じませ。四郎様とお前様との戀争ひは、隠すとすれど顯はれて、わたし等もよ

う知つて居りますぞ。

(侍女等は笑ふ。勝頼、つかくと進み出づれば、皆々心附きて互ひに顔を見あはせる。)

勝頼。相變らず女子どもは姦しいことぢや。今日は具足開きの御祝儀で、なにかと御用も多から

うに、こゝらにうろくせずと早うのけ。

甲乙丙。かしこまりました。

(侍女等は早々に立ち去る。)

武田信玄

勝頼。彌三郎、唯今あれに聞いて居れば、そちは甲州一の美男、こがるゝ女子も多いとやら、羨ましいことぢやな。

彌三郎。左様におたはむれ遊ばすな。武勇を表とする武田のお家に於て、女子の噂など禁物でございます。

勝頼。おゝ、よくぞ申した。さりながら、むかしより名將勇士にも戀はある。武士が戀したとて不思議でもあるまい。かくいふ勝頼も戀といふ大敵に惱まされて、朝な夕なに憧憬れて居る。その相手は誰あらう。彼の黒姫ぢや。

彌三郎。左様でござりまするか。(空嘯きて取合はず。)

勝頼。富士の雪よりも白き乙女、荒川の水よりも清き乙女……勝頼の妻たるべきものは、彼の姫ならでほかに無い。彌三郎、なかだち頼むぞ。

彌三郎。それがしに媒妁せよと仰せられますか。

勝頼。おゝ、勝頼が確と頼んだ。

彌三郎。仰せではござりますが、この儀は御免くださりませう。

勝頼。ならぬと云ふか。何さまさうであらう。(妬げに冷笑ふ。)この上は誰をも頼まぬ。予はおの

彌三郎。れ一人の力で、この戀かならず遂げてみせうぞ。それはお前様の思召次第……。

(彌三郎もあざ笑ふ。勝頼すこしく急ぎ立つ。)

勝頼。われ十六歳の初陣より戦へばかならず勝つ。思ふことはかならず貫く。勝頼の弓矢の前には、ふせぐべき楯も鎧もないと思へ。

彌三郎。弓矢と戀とは違ひますぞ。

勝頼。その詞を忘るゝな。

彌三郎。御念には及びませぬ。

(明白には云はれど、ふたりは嫉妬の念に堪へず、しばしは黙して睨み合ふところへ、近習の武士一人は袴を持ち來りて、四阿に敷くつゞいて武田信玄は小姓に太刀を持たせて出づ。うぐひすの聲(いひ)。)

信玄。山の峽とは云ひながら、梢をわたる春風に鶯の聲も暖かうきこゆる。けふは殊に日和も好し、雪をいたゞく富士の高根も、手に取るやうに見ゆるなう。

(勝頼も四阿の下手に腰をかけ、彌三郎はひざまづく。)

彌三郎。仰せの通り、曆も春とあらたまりし後は、餘寒俄に薄らぎて、空も長閑に晴れつゝいて居ります。

信立。

よい春ぢや。(打笑みて)けふは正月十一日、新羅殿より傳はりし家の重寶、無楯の鎧をかざりて禮拜し、源家由緒の諸侍が白羽染羽の矢をそなへて、武運長久を祈りし後、上下打ちくつろいで酒宴を催すが武田の家ふるき習ぢや。式をはじむる酉の刻までにはまだ一响の間はあらう。こりや、彌三郎。かねて申付け置いたる通り、葡萄酒の用意はよいか。

彌三郎。

はあ、今日の御祝儀相濟みまするまでは、何人にも手を觸れさせぬやうに水屋の戸には固く錠をおろして、日々油断なく見廻つて居ります。

信立。

お、左様か。戸をあけて見せい。

彌三郎。

はあ。

(彌三郎は懐中より錠をとり出して、水屋の錠をひらけば、近習も手傳ひて戸をあける。水屋のなかにば蒸にてつゝみたる大瓶三個ほどならべり。)

勝頼。

年々醸す葡萄酒の酒、今年の味ひはどうでござりませうな。

信立。

甲州の人が天下にはこるは富士の雪と葡萄酒の酒ぢや。唐土の涼州にては、家ごとに葡萄酒をたくはへて甘き酒を醸すと聞くがまゝに、我も十年前より彼に倣つて、到るところの山野に葡萄酒を栽ゑさせ、熟せし秋の實をとりて瓶にたくはへ、初めは土中にうづめ置くこと一年、その漬るを待つて更に水屋に移し、瓶の口を固く封じて開くをゆるさず。かくして更に半年を経たる後、試みにこれを啜るときは、酒の味ひさながら甘露のごとくにして、その酔心地も譬ふるに物もない。天の美祿とはまことにこれぢや。

彌三郎。

人跡遠き深山の奥には、猿酒とかいふものありと承はりまするが、所詮これには及びますまい。唯この葡萄酒の色は、血汐のやうに紅いと申して女子などは思ひまする。

信立。

酒の色が血に似てゐると申すか。血をすゝるは武士の習ぢや。血を嗜まねばまことの勇士とは云はれぬぞ。はゝゝゝ。思ひおこせば十年以前、初めてこの酒を造りしときに、諏訪頼茂の血を見たわ。

勝頼。

なにさま其砌、諏訪信濃守頼茂をあざむいて、常屋形へまねき寄せ、猿樂のおん催しがござりました。

信立。

酒宴やうやく酣なる頃、これは甲州にて初めて醸したる葡萄酒の酒、こゝろみに飲んで御

武田信立

覽ぜよと、あかき酒を杯に盛りて勧めしところ、頼茂元來下戸なれども、酒の甘きに酔はされて、われにもあらで杯をかさね、前後不覺と相成つた。その隙をみて多人數一度に切つてかゝり、頼茂主從五十餘人を一人も餘さず討取つたれば、信州諏訪と伊奈の二郡は、手をぬらさずして我物となつたのぢや。されば年々この酒を飲むごとに杯にみなぎる紅の色を見て、はかなく亡びし頼茂の血を思ふぞ。

信州諏訪の城主として、武勇秀でたる信濃守も尾形の御計略に陥つて、半日のあひだに滅亡せしは、けにも果敢ないことぞざりましたな。

頼茂も一器量ある大將、容易にあざむくべき敵にはあらねば、かれの娘はわが妻にて、婿の親みある仲なれば、かれもさすがに油断して、思ひも寄らぬ不覺を取つたのぢや。甲斐の信立は現在の舅を討つて、その領地を奪ひしと、兎かうの批判を下す者もあるさうぢやが、誹る者は誹れ、憎むものは憎め。今この亂れたる世のなかに、婿といひ舅といひ、兄と云ひ弟といふもつまりは假の名に過ぎぬ。油断したら痲首をか、れうも知れまい。たとひ不義とも云は、いへ、先ずる者が人を制するのぢや。とは云へ、われも頼茂を討ちほろぼして、流石に心よいとは思はぬ。(すこしく嘆息して) されば彼が次の娘……わが妻に

信立。

彌三郎。

は妹にあたる黒姫を幼少のころより手許に養ひて、ゆく／＼は然るべき婿を取らせ、諏訪の家名を立てさせたくも思ふのぢや。

勝頼。

では、黒姫と縁組するものは、諏訪の家名を相續せねばなりませんか。

信立。

さうと決つたことでもないが……。黒姫もまだ十七、婿の詮議は追つてのことぢや。左のみ急ぐにも及ぶまい。

(鐘の聲きこゆ。)

信立。

お、日影もやうやく西へ廻つて、富士のいたゞきも曇つて來た。(起ち上る。)

勝頼。

一同出仕いたすまでは、奥にて御休息あそばしませ。

(信立首肯きてゆく。勝頼をはじめ近習小姓等もしたがひて去る。彌三郎は見送りて立つ。下手の梅の木かげより黒姫、忍び足にて出づ。彌三郎は思案にくれて心づかず。黒姫は男のそば近く進み寄る。彌三郎始めて心づき、たがひに顔を見あはせて無言に打笑む。)

彌三郎。

お姫様、いつの間にか……。

黒姫。

最前から來てゐたれど、屋形や四郎殿がこゝに御座つたれば、しばらく木かけに忍んでゐたのぢや。

武田信立

彌三郎。なぜ隠れておいでなされました。

黒姫。なぜと云ふことも無けれども……。脛に疵持つとか云ふことわざの通り、人の見る前でそ

なたと一緒にゐるのは、なにやら恥かしくてならぬのぢや。いや、恥かしいは通り越して怖ろしいやうにも思はれてならぬ。(左右をみかへる。)

彌三郎。はて、お氣づかひなされますな。

(黒姫は彌三郎に請ぜられて、四阿に腰をかける。うぐひすの聲また聞ゆ。)

彌三郎。よい折柄、お前様におたづね申したい儀がございます。

黒姫。あらためて聞きたいことは……。

彌三郎。お前様は四郎どのをなんと思召します。

黒姫。勝頼どのを……。

彌三郎。四郎どののは日頃からお前様に御執心でござりますぞ。

黒姫。勝頼どののは妾腹、わらはは奥方の妹でないか。年嵩でも勝頼は甥、年下でも妾は叔母ぢや。

たとひ血筋の縁はなうても、叔母甥とよばるゝ間柄で、色の戀のと云ふことがあらうか。それはそなたの邪推といふものぢや。

彌三郎。叔母甥と申すは表向きの義理、申さば他人も同様ののおまへ様に、思ひをかけぬとも限りま

すまい。現在先刻もそれがしにむかつて、媒妁せいと申されました。

黒姫。あの、勝頼どのが……。そのやうなことを云はれたか。

彌三郎。四郎どのの確に申されました。が、彌三郎は承知しませぬ。お前さまを人に渡すことは、彌三郎が命にかへても承知いたしませぬ。さやうな儀は相成りませぬとお断り申上げました。

黒姫。それを聞いて妾も安堵しました。

彌三郎。いや、なか／＼御安心はなりません。思ふことはかならず貫く。この戀必ず遂けてみせうと、四郎どののはよく／＼御執心のやうに相見えしました。なにを申すも相手は御主君の若殿、彌三郎は家柄もなき若侍、所詮はお前様に捨てられて、生甲斐もなき身となるでござりませう。

黒姫。なぜそのやうな恨がましい事を云ふ。わらはも女子の操は知つてゐる。たとひ主従とは云へ、一旦そなたに心を許したからは、あれ、あの富士の雪が一夜に消える事があつても、妾のこゝろは變るまいぞ。

彌三郎。

そのお詞にお借りはござりませぬな。

黒姫。

いつはりはない。神かけて誓ひました。

彌三郎。

では、それがしの所存を申上げませう。(左右をうかゞひて。) お姫様、今宵は年々の嘉例によつて、新に醸したる葡萄酒の酒を取り出し、先づ無楯の御鎧にさゝけ、次に屋形、次に四郎どのが杯を取られます。水屋を預かるはそれがしの役目でございますれば……。

(進み寄つて黒姫の耳にさゝやけば、姫は色を變へる。)

黒姫。

え、怖ろしいことを……。そなたは氣でも狂うたか。

彌三郎。

氣が狂うたかも知れませぬ。よくかんがへても御覽じませ。四郎どのは妾腹と申しながら日ごろより屋形の御寵愛あつく、ゆくくは二代の屋形と、人も許してゐるほどの御仁でござりまする。その四郎どのが御執心のお前様とあるからは、やがては屋形のお聲がかりで、邪が非でも御縁組と相成りませうぞ。その曉にはお前様も彌三郎も、死ぬよりほかはござりませぬ。

黒姫。

さあ。

彌三郎。

ふたりは生きて居られませうか。

黒姫。

さあ。

彌三郎。

とても死ぬる程ならば、覺悟を極めねばなりません。

黒姫。

ぢやと云うて、そのやうな怖ろしいことを……。勝頼殿との縁談がけふに迫つたと云ふでも無し、かならず急には及ばぬことぢや。ゆるく思案してたもれ。

彌三郎。

いや、いや、おちついては居られませぬ。日ごろから一徹短氣の四郎殿が先刻の口ぶりでは、明日にも……いや、今夜にも、何事を仰せ出されうも知れますまい。おくれて後悔なされますな。

黒姫。

と云うて、義理ある兄上を……。

彌三郎。

義理ある兄と仰せられますが、屋形はお前様のかたき、現在の親御の仇ではござりませぬか。

黒姫。

さう云やれば、姉上とても同じことぢや。

彌三郎。

姉上には姉上のお心がござりませう。お前様のことはお前様ひとりで御分別遊ばしませ。(水屋を指さして。) 彼の酒に毒薬を混じて、屋形と四郎どのを一時にうしなへば、武田の家は燈火を失ひしも同様。その虚に乗じて信濃の殘黨をかりあつめて、弔合戦の旗をあぐ

れば、諏訪のお家再興はまた、く間でござりませうぞ。左すれば亡き親御にも御孝行、ふたりの戀も首尾よく成就……。

(黒姫は思案に迷ひて黙す。彌三郎はいよく急いで詰め寄る。)

彌三郎。今となつてなんの御分別……。彌三郎は戀のためには恩を忘れ、義をわすれ、法に背き、道にそむき、生きながら魔道に墮ちて、主をほろほす謀叛人となりましたぞ。もし、お姫様……。

(彌三郎は姫の手を取つて、葡萄棚の下に連れてゆく。)

彌三郎。去年の五月、庭のこすゑも青葉して、葡萄の花の咲くころに……。 (棚をみあげる。)

黒姫。お。

彌三郎。その誓を反故にして、彌三郎を見殺しになされますか。

黒姫。さあ。

(黒姫は返事に困じてゐる。葡萄棚のかけより信玄の奥方諏訪の方出て来り、二人のあひだに進み寄る。彌三郎初めて、こゝろづく。)

彌三郎。や、奥方のお越しでござりましたか。

諏訪。二人はこゝに何してゐやつた。

黒姫。え。

諏訪。やがてもう日も暮るゝに、うろくしてゐる時ではあるまい。彌三郎、見れば顔の色もよくないやうぢやが、もし気分でも悪いなら、今宵の出仕は見合せてはどうぢやな。

彌三郎。いえ、気分にはござりませねば、今宵のお役は相違なく相勤めします。

諏訪。さうかなう。(思案して) わらはは黒姫に少しく話もある。兎もかくも詰所へ退つて休息しや。

彌三郎。はあ。

(彌三郎は心残して下手に去る。諏訪の方はあとを見送りて、ひとり言のやうにいふ。)

戀に狂うた若侍、おそろしいことを巧んだなう。

黒姫。では、今の密談を……。

諏訪。木かけで残らず聞いてゐました。なるほど、彌三郎のいふ通り、夫とたのむ信玄どのは、われ／＼姉妹には親のかたきぢや。父上をこの屋形へおびき寄せて、だまし撃にしたお人

黒姫。

ぢや。さりながら、婿舅が敵となるも戦國の習、一旦人の妻となれば、夫にしたがふが女子の道と覺悟して、十年後の今日まで屋形を恨む心は微塵も持たぬ。そなたとても同じこと。をさない頃から養はれて、親とも兄とも頼むお人を、かたきと恨まう筈はあるまい。屋形は現在のかたきなれど、今となつては是非がござりませぬ。親の仇を兄とたのむも、宿世の縁とあきらめて、これ、この葡萄の蔓が柵にからんでるやうに、兄上大事とお頼り申して居りまする。

諏訪。

さうなうては叶はぬことぢや、不運といへば不運なれど、人には定まつた運がある。それを乗越えようとする時は、その身の破滅をまねく基とならう。そなたも其道理をわきまへながら、なぜあの彌三郎などと不義しやつた。……と叱つても返らぬこと。若い者の無分別から戀にこゝろも眼も眩んで、世におそろしい大事を巧む奴、あれは正氣の人ではない。わらはの眼より見るときは、正しく狂人……たしかに亂心狂氣の沙汰ぢや。彌三郎が此後どのやうなことを云ひ出さうとも、かならず相手になるまいぞ。よいか、判りましたか。

黒姫。

はい。

諏訪。

彌三郎のことなどは吃と思ひ切らねばならぬ。事荒立て、は二人の難儀にもなること。妾

ひとりの胸に收めて、無事に納むる法もあらう。悪いやうにはせぬほどに、何事も姉にまかして置きや。

黒姫。

はい。

諏訪。おほつかない返事ぢやなう。(姫の顔をきつと視て。)あのやうな者に情立て、姉の意見をきかぬとあれば、此場かぎりで勘當しますぞ。

黒姫。

え。

諏訪。

まだ云ひ聞かすこともある。わらはと一緒に奥へ來や。

黒姫。

はい。

(諏訪の方は先に立ち、黒姫はおづ／＼そのあとにつきて奥に入る。下手の木かげより彌三郎再びうかゞひ出づ。)

彌三郎。

戦國の習とあきらめて、親のかたきに連添ふ奥方には我々のこゝろは判るまい。(あざ笑ふ。)大事を覺られた上からは、これよりすぐに追つ掛けて。諏訪の方を一刀に打つて捨て、姫を連れて立退かうか。

(彌三郎は刀に手をかけて行きかけしが、又思案す。)



彌三郎。

いや、いや、奥方が今の口ぶりでは、大事を人に洩さうともおほえぬ。なにかの越度を云ひ立て、われを遠ざくる手だてと見た。さらば今宵を過さず、我より先に……む。

(彌三郎はふところより墨紙につみたる毒薬を取り出し、前後を見まはしつゝ、水屋のうちに忍び入り、瓶の栓をひらきて、毒を注がんとす。下手より勝頼うかゞひ出づ。)

勝頼。

待て。

(走りかゝつて組まんとするを、彌三郎打拂ひながら、毒を瓶のなかに投げ込む。勝頼焦つて又組みつき、双方しばらく挑みしが。彌三郎は遂に組み伏せらる。)

勝頼。

やあ、おのれは……。水屋に忍び入つてなんとした。仔細をいへ、仔細を申せ。

(彌三郎黙して答へず、勝頼はその利腕を取つて捻ぢ付ける。)

勝頼。

え、云はぬか、申さぬか。誰かある。繩を持って。

(奥より諏訪の方走り出つ。)

諏訪。

あ、これ竊かに……。 (制して。) 人にきこえては悪いほどに、まあ静にしてたもれ。

勝頼。

では、這奴をおかばひなさるか。

諏訪。

此ふと云ふではなけれども、わらはにも思案がある。まあ、まあ、待ちやれ。

勝頼。

ぢやと申して、葡萄の瓶になにやら投げ込んだるは、察するところ、毒薬のたくひを……

諏訪。

はて、待ちやといふに……。

勝頼。

いや、這奴重々不届きでござれば……。

諏訪。

詮議するにも法がある。立騒がすと静にしやれ。

(諏訪の方しきりに制するところへ、奥より武田信玄は近習一人を召連れて出づ。)

信玄。

はて、騒がしい。彌三郎めが何としたのぢや。

勝頼。

あたりに人無きをうかゞひて水屋に忍び入り、なにやら怪しき一薬を、葡萄の瓶に投げ込みました。

みました。

信玄。

彌三郎、相違ないか。

(勝頼は彌三郎をひき起す。彌三郎は思案をさだめて頭をあげる。)

彌三郎。

いかにも相違ござりませぬ。

信玄。

不思議な奴ぢやなう。(思案して。) よい、よい。彌三郎は信玄が直々に吟味する、餘の者共

はみな行け。

勝頼。

でも、這奴を手放しましては……。

武田信玄

信立。氣遣ひいたすな。

勝頼。はあ。

(勝頼餘儀なく手をゆるむれば、彌三郎は土に坐す。)

信立。茶椀を持て。

近習。はあ。

(近習は去る。諏訪の方は起ちかれて、躊躇する。)

諏訪。

わらはは少しく心がかりの儀もござりますれば……。

信立。

いや、お身達がこゝに居つては邪魔になる。暫時遠慮せられい。四郎もゆけ。

勝頼。諏訪頼頼。

はあ。  
(諏訪の方はおぼつかなくも奥へゆく。勝頼も下手に去る。信立はあづまやに腰をおろす。)

信立。

彌三郎、近う寄れ。

彌三郎。

はあ。

信立。

そこでは話が遠い。もそつと近う……。これへまるれ。

彌三郎。

はあ。

信立。

(彌三郎は胸を据ゑて、信立の膝許まで進み寄る。)

さて彌三郎。この水屋は其方のあづかりぢやが、新に醸したる葡萄酒の酒に怪しき薬を投げ入れたと云ふ、その仔細はどうぢや。

彌三郎。

恐れながら屋形御親子を……。

信立。

毒害せんと巧んだか。

彌三郎。

はあ。

越後の上杉、小田原の北條をはじめとして、近國諸國に武田の敵も多い。その敵共に頼まれたか。

彌三郎。

敵にたのまれて人を殺さんとするは、間者か細作の業でござりまする。萩原彌三郎は人に

信立。

頼まれて、かやうな大事は企てませぬ。

彌三郎。

しからば信立に恨みがあつてか。

信立。

屋形にお恨みはござりませぬが、四郎どのは戀のかたきでござりまする。

彌三郎。

なりや、勝頼をなぜ討たぬ。信立までも恨むは筋違ひぢや。

四郎殿ばかりでなく、屋形が無事におはしては、所詮望みは叶ひませぬ。

武田 信立

信立。信立親子を殺さずば、望みのかなはぬほどの戀をするとは大膽な奴ぢやなう。(打笑みて)して、その相手は……。

(彌三郎答へず。)

信立。云はぬならば云はぬでよい。去年の夏のゆふぐれぢや。葡萄の花さく下に立つて。樂しけに語ふ若い男と女があつた。

彌三郎。

信立。

知つて今まで捨て置いたは、信立のなさけとは存ぜぬか。譜代ながらも其方は小身、黒姫とすぐに縁組もなるまい。なにかの手柄をした晩には、しかるべき身分にも取立て、さして其上で婿にもせうと、ひそかに時節を待つうちに、かゝる大事を巧むとは、憎いを通り越して愚な奴め。して、毒を沈めたる瓶といふは……。

彌三郎。

(第二の瓶でござります。)  
(近習は茶碗を持ち出て出づ。信立無言にて受取り、あちらへゆけと眼で知らずに。近習は一禮して去る。)

信立。

彌三郎。この期に及んで卑怯につゝみ隠さず、何事も有體に申立てしは流石に甲州武士、

殊勝にも存するぞ。萬一其方の望みのごとく信立をうしなひ、勝頼を殺した後は、武田の家をなんとするのぢや。

彌三郎。

信立。

黒姫殿の縁に因つて信州の殘黨をかりあつめ、諏訪の家再興の旗を揚げうと存じました。はゝゝゝゝ、おのれは夢をみて居るな。蟻螂の斧とも何とも警へやうもない始末ぢや。前髪立のころより信立のそばに奉公して、律義一途と思ひし其方が、これほどの大望を懐かうとは……。 (彌三郎の顔をつつく。視て。) それも畢竟は戀の科ぢや。諏訪の血筋をひく黒姫に、不便をくはへて養ひ置きしは、今更おもへば禍の種であつた。此後とても其方ごとき不所存者が再び出で來ぬともかぎるまい。(嘆息して又形をあらため。)

彌三郎。

信立。

あたりにも無し、よき折柄ぢや。信立を討つて諏訪の家を興すか。

彌三郎。

信立。

其方は刀を持つてゐるであらうが……。 (彌三郎はのき響すして俯向く。)

信 立。

は、信立を討ち得ぬか。さらば其方は自滅のほかはないぞ。これへまるれ。

(信立は茶碗を持ちて悠然として立ちあがり、水屋の前にゆく。彌三郎も續いてゆく。)

信 立。

第二の瓶の酒を汲め。

(茶碗をわたせば。彌三郎は第二の瓶より紅き酒を汲む。信立は更に小刀を鞘のまゝ抜きて出す。)

信 立。

かりにも主をほろぼさうと企てたる罪人、自滅の途はたゞ一つぢや。その酒か、この刀か、ふたつに一つを選べ。

彌三郎。

はあ。

(彌三郎はちつと思案して、茶碗の酒をぐつと飲む。信立はその手を捉へる。)

信 立。

いや、その酒は飲みほすな。ほかにも飲ませる者がある。

彌三郎。

え。

信 立。

武田の家を取つては禍の種、其方を取つては迷ひの種に、その半分を残しておけ。

(茶碗を取りて傍に置く。彌三郎は苦痛ながらに這ひ寄る。)

彌三郎。

では、もしやその酒を……。

信 立。

葡萄の花の咲くを待たで、若き二人は……。 (その顔を見て) 戀しい女に未來で逢へ、

信 立。

苦痛をさせぬは主の慈悲ぢやぞ。

(信立は刀をぬきて確と切れば、彌三郎倒る。時の鐘きこゆ。信立は血刀をぬぐひて鞘に収む。向井

孫次郎出づ。)

孫次郎。

もはや時刻でござりますれば、なにとぞ御出仕願はしう存じまする。

信 立。

お、一同は出仕したか。

孫次郎。

はあ。

信 立。

よい、よい。

(信立うなづきて頭にてまねけば、孫次郎は近きて彌三郎の死骸を見つける。)

孫次郎。

や、こりや彌三郎を御手討に……。

信 立。

さわぐな。人目に立たぬやうに取片附けい。

(信立は刀を腰に佩びて、彼の茶碗を取る。孫次郎は彌三郎の死骸をひき起す。)

(11)

おなじく屋形の廣書院。舞臺一面に薄縁を敷き、上のかたに寄せて上段の間を設く。左右は彩色の襖なり。日暮れて燈臺を點し、上段の間の上手に武田家の重寶たる諏訪法性の兜と無楯の鎧とを飾りて、その前には三方にのせたる鏡餅を供へたり。

(武田勝頼、諏訪の方、黒姫の三人は、衣服をあらためて上段の間に坐し、下には甘利左衛門尉内藤修理正、小山田將監、秋山伯耆守の四人が白羽または染羽の矢を持ちて着座す。)

甘利。こよひは年々の御嘉例に依つて、具足びらきの御祝儀を行はせらるゝ。もはや御出座に間もあるまい。一同も打揃うて居るでござらうな。

内藤。侍大將組頭に至るまで、御譜代の面々は、先刻よりみな打揃うて控へ居ります。先づは御祝儀めでたい儀でござる。

小山田。新年には重代の鎧兜をかざり、鏡餅を供ふるは、御當家がおそらく始めでござらうが、近國の諸大名も次第にこれに倣ふとうけたまはる。

秋山。いや、近國ばかりではござらぬ。このごろは京都の將軍家に於ても、具足開きの式がある

勝頼。とか申すは、御當家の御家風がそれからそれへと擴まつたと相見えまする。武田の家風、甲州の軍法が、しだいに世間に擴まるは、家のほまれぢや。やがては上洛の旗を樹つる時節もあらう。

甘利。われ々も其時節の到るを相待ち居ります。 (上手の襖をあけて、小姓一人出づ。)

小姓。屋形、御出座にござりまする。

(高聲に云ひすて、引返せば、一同は形をあらたむ。上下の襖よりも家臣大勢いづれも矢をたづまへて出て來り、左右に居流れる。上段の間の襖をあけて、武田信玄は衣服をあらため、小姓に太刀を持たせて出づ。)

信立。みな打揃うたか。

甘利。はあ。かく申す甘利左衛門。

内藤。内藤修理。

小山田。小山田將監。

秋山。秋山伯耆。

武田信立

甘利。そのほか御譜代の面々、いづれもこれに控へて居ります。御家の御運いよく開けて、今年もかはらぬ吉例の御祝儀。

黒姫。憚りながら妾も共に、おめでたう存じあげます。

勝頼。われ〜一同も御祝儀……。

皆々。申上げます。

(一同平伏す。信玄嫣然にうなづく。)

信玄。まことにめでたい春ぢやなう。越後の上杉は北國の雪に閉ぢられて人馬を進めがたく、小

田原の北條は去年のいくさに疲れてしばらく鋒を收め、駿河はわれと和睦して、上野は已

に歸伏したれば、雪の融くる頃まではおそらく弓矢の沙汰もあるまい。

勝頼。仰せの通り、差當つては四方の境に、敵の亂入する虞もござりませぬ。こゝ二月三月は太

平の春を樂めます。

信玄。まして今宵は一年一度のめでたき日ぢや。一同打ちくつろいで酔うてくりやれ。酔うて唄

ひ、唄うて舞へ、今宵ばかりは無禮講ぢや。はムムム。

内藤。ありがたい儀にござります。が、先づ御酒宴に先づつて、具足開きのおん式を……。

信玄。

勿論のことぢや。これに飾りし無楯の大鎧は、新羅三郎どのより傳へて廿七代、武田の家にとつては無二の重寶たること今あらためて申すまでもない。諏訪法性の兜は、諏訪明神の靈夢によつて作らせたる希代の寶ぢや。この二つは當家の弓矢神とも尊むべきもの、かならず粗略に存するな。こよひも年月の例に依て、新に醸したる葡萄酒の酒をそなへ、一同にもさかづきを取らずぞ。

皆々。はあ。

信玄。孫次郎、神に供ふる酒を持て。

孫次郎。はあ。

(上手の袂をあげて向井孫次郎は、腰に白羽の矢をさし、ふたつの酒壺を三方に乗せてさげ出す。)

孫次郎。葡萄酒の酒を持參。仕つてござります。

(孫次郎進んで、鎧の前に三方を直し、一禮して末座に控ふれば、信玄も形だあらためる。)

信玄。さらば信玄より先づ禮拜するぞ。正八幡大菩薩、南方諏訪大明神、新羅三郎義光公御尊靈、

武田の弓矢に加護あらせたまへ。

(諏訪の方、勝頼、黒姫等もおなじく禮拜す。)

武田 信玄

信立。今宵は信立すこしく存する旨あり。それにある一同の者は、當家に對して二心をいたくまじと、あらためてこの甲冑の前に誓へ。

皆々。はあ。

(一同は鎧兜に向つて形をあらためる。)

甘利。天地の神々は申すにおよばず、御先祖代々の尊靈も見そなはせ。

内藤。武田のお家に對して、未來永劫二心あるべからず。

小山田。萬一この誓をやぶる者は、冥罰たちまち其身に降りて、

秋山。生きては天雷に碎かれ、死しては地獄に墮ちん。

甘利。われく一同、改めてこゝに……。

四人。告げたてまつる。

(孫次郎をはじめ、他の家來共もすべて禮拜す。)

信立。それ聞いて予も満足ぢや。この上は例によつて矢を供へよ。

勝頼。三方を持て。

小姓。はあ。

(上手の袂より小姓は三方をさゝげて出で、鎧兜のまへに据ゑて去る。)

信立。鎧には白羽の矢、兜には染羽の矢、思ひくりに供へてよからう。

皆々。はあ。

(甘利は先づ進んで三方に矢をさゝぐ。つゞいて内藤、小山田、秋山等も矢をさゝぐ。孫次郎及び

他の家來も進んで矢をさゝげ、禮拜して退く。)

勝頼。これにて式もとゞこほりなく相濟んだれば、いでや酒宴を開き申さう。

信立。お、用意よくば杯持て。

勝頼。小姓共、侍女ども……。用意の酒肴を運び出せ。

(上下の襖まり美しき小姓數人と侍女數人は、銚子、土器、肴などをさゝげ出で、よきところ安置

きならべる。)

信立。さて一同とこゝろよく飲まうぞ。

皆々。はあ。

(小姓侍女等は上段の間にのぼりて、小姓は信立と勝頼の酌に立ち、侍女は諏訪の方と黒姫の酌に立つ。これと同時に、他の小姓と侍女等は甘利その他の家來一同に酒をすゝむ。)

諏訪。

今宵は無禮講とお許しもある。みな遠慮無しに酔うたがよい。

黒姫。

わらはもこれでお相伴をしまする。

甘利。

恐れ入つてござりまする。なんと方々、かやうに打寛いで御酒を頂戴するは、近頃ないことぢや。

内藤。

去年は春早々から軍つゞきで、一年の半分以上は陣中に暮し申した。

小山田。

そのなかでも川中島の合戦などは、今更おもへば危いことでござつたよ。

秋山。

あの時に追ひ巻られたら、かやうなめでたい春は迎へられまい。

信立。

む、あの戦ひは随分難儀であつたよ。越後の謙信は敵ながら天晴れの大将ぢや。

勝頼。

車がかりの備を立て、入れ替へ入れかへ寄せて来るには、味方も疲れ果てました。

孫次郎。

それを最後まで持ちこたへて、互角の勝負に終つたは、屋形の御運のめでたい所でござりまするな。

内藤。

いや、御運のめでたいは勿論ぢやが、味方もあの折はよう働いたぞ。

小山田。

第一に我等のごときは、無二無三に川を押渡つて、越後の旗本を突き崩したわ。

秋山。

え、又してもお身の功名話。われ等とても其砌りには、宇佐美の陣を追ひ散らしたぞ。

甘利。

いや、功名争ひなら我等とてもあとへは退くまい。高梨山の麓まで謙信を追ひつめたは

信立。

そも誰の働きぢやと思はるゝぞ。

(笑をふくむ) 待て、待て、功名は其方達ばかりでない。孫次郎をはじめ、末座に控へし若者どもの中にも、めざましい働きを致したのも多くあるぞ。平生は分別顔する其方達が子供のやうな手柄自慢はおとなげない。若者どもに笑はるゝぞ。嗜め、たしなめ。は、は、は、。

皆々。

は、は、は、は、。

(一同も顔をみあはせて笑ふ。)

諏訪。

このやうに一同がうち解けて、笑ひ興じて居りまするは、一門主従和熱のしるし、嬉しいことでもござりまする。

信立。

酔つて兵を談ずるはわが家の習ぢや。予も殊のほか面白う思ふぞ。ついては興を扶くるために勝頼舞へ。

勝頼。

はあ。

甘利。

なに、四郎殿がお舞ひなさるか。

武田 信玄



勝頼

お、勝頼が舞うてみせるわ。

内藤

これは大藏の大夫の猿樂よりも面白いことでもござらう。

勝頼

あまりに面白過ぎて笑ふなよ。

信立

(勝頼は下に降り立つ。一同は左右に退きて見物す。)

勝頼

勝頼はなにを舞ふな。

田村

田村の後を舞ひまする。

勝頼

(勝頼は扇なとり直して、まん中に進み出づ。)

勝頼

(詰ふ。)あれをみよ、不思議やな。

地(あれを見よ、不思議やな。味方の軍兵の旗の上に、千手観音のひかりを放つて虚空に飛行し、千の御手毎に、大悲の弓には智慧の矢をはめて、一度放せば千の矢先、雨あられと降りかゝつて、鬼神の上にもみだれ落つれば、ことごとく矢先にかゝつて、鬼神はのこらず討れにけり。)

(勝頼舞ひ終る。)

甘利。いや、お見事でござつた。

皆々。お見事、お見事。

(勝頼舊の座にかへる。信立うち笑む。)

信立。これも座興ぢや。舞の巧拙は措いて、兎にかく面白いことであつたぞ。あれに供へし葡萄の酒を、いでや頂戴いたさうか。孫次郎、酌に立て。

孫次郎。はあ。

(孫次郎進んで、鎧の前に据ゑたる三方を持ち來り、信立の前におく。信立は土器を取る。勝頼と諏訪の方は顔を見あはせる。)

(心もとなげに。)葡萄の酒を飲ませられまするか。

お、信立が先づ頂戴して、其方達にも分けてやるぞ。

でも、その酒は……

飲んで悪いか。

二人。さあ。

(勝頼と諏訪の方は再び顔を見あはせる。)

信立。いざ、酌をいたせ。

武田 信立

二九五

孫次郎

はあ。

(孫次郎は一方の壺を取りて酌をする。信玄はこゝろよく傾ける。)

信玄

今更ならねど甲州一品の葡萄酒の酒、その味ひは格別ぢや。

(勝頼も諏訪の方もや、安堵したる體。信玄は土器を置く。)

信玄

勝頼が舞うたれば、今度は黒姫の番ぢやぞ。

黒姫

仰せではござりますが、もとより未熟の拙い舞振、どうして諸人の見る前で……。この

儀は御免くださりませ。

信玄

いや、遠慮に及ばぬ。勝頼とは違つて、そちが舞の上手といふことは諸人もよく存じて居

る。早う舞うてみせい。

諏訪

あのやうに仰せらるゝを、御辭退申すも却つて失禮。つたない舞をお目にかけてがよい。

黒姫

では、お恥かしうござりますれど……。

信玄

舞うて見するか。よい、よい。さらば褒美にさかづきを取らすぞ。

黒姫

ありがたうござりまする。

信玄

それ、孫次郎。葡萄酒の酒を……。

信玄

(眼で知らすれば、孫次郎は心得て、他の壺をとりて酌をする。黒姫は酒を飲む。)

孫次郎

孫次郎もそれに控へて見物いたせ。  
はあ。

(孫次郎は退きて上手に坐す。)

小山田

黒姫殿のお舞とあれば、また一段と鮮かでござらう。

秋山

めつたに拜見は出来ぬこととござる。

(黒姫は下に降りて手をつかへる。)

黒姫

なにを仕つりませうか。

信玄

黒姫には所望がある。女子にはふさはしい玉取の段を舞へ。

黒姫

かしこまりました。

(黒姫起つて舞ふ。)

地  
かくて龍宮に至りて、宮中をみれば、その高さ三十丈の玉塔に彼の珠を籠め置き、香花をそなへ守護神は、八龍並みたり。そのほか悪魚鰐の口、逃れがたしや我が命、さすが恩愛の故郷の方ぞ戀しき。あの波のあなたにぞ、我子はあらん、父大臣もおはすらん。さる

或 田 信 玄

にてもこのまゝに、別れ果てなん悲しさよと、涙ぐみて立ちしが……。

(舞ふうちに、黒姫は胸に苦痛をおぼえて、舞の足許は漸次にみだれ、思はずよめきて小膝を突く。)

諏訪。 や、黒姫には……。なんとしました。

勝頼。 舞の足もと亂れしは……。

信立。 いや、葡萄の酒に酔うたのであらう。黒姫、諸人の見る前ぢや。氣を勵まして、舞へ、舞へ。

黒姫。 はあ。

地。 又思ひ切りて手をあはせ、南無や志度寺の觀音薩埵の、力をあはせてたび給へとて、大悲の利劍を額にあて、龍宮のなかに飛び入れば、左右へばつとぞ退いたりける。

(黒姫は苦惱いよく烈しく、舞ひながら幾たびか轉ばんとす。諏訪の方、勝頼をはじめ、他の者共もあやぶみながら見物す。)

地。 そのひまに寶珠をぬすみ取つて逃げんとすれば、守護神追つかく。かねて巧みしことなれば、持ちたる劍を取直し、乳の下をかき切り玉を押しこめ、劍を捨て、ぞ伏したりける。

甘利。 や、黒姫どのが倒れしは……。

小山田。 俄に病の起られしか。

内藤。 但しはほかに仔細あつてか。

秋山。 こりや唯事ではござるまい。

(一同騒ぎ起たんとするを、信立は再び制す。)

信立。 黒姫は酔うて倒れたのぢや。

皆々。 はあ。

信立。 かよわき女子は一杯の酒にも倒るゝ……。 (ほゝ笑みて) 孫次郎、次の間へ連れゆきて介抱いたせ。

孫次郎。 はあ。

(孫次郎すゝみ出で、黒姫を抱き起す。黒姫は已に正體なし。末座の若侍二三人手傳ひて、姫を上手の襖のかけへ昇き入る。)

勝頼。 とは云へ、どうやら心許無し。姫の容體を見とゞけ申さう。

武田信玄

諏訪。

わらはも一緒に……。

(兩人起ち上らんとするを、信立は遮る。)

信立。

いや、左様に立騒いで座が白ける。(一同にむかひ)皆もつゞけて飲め。

皆々。

はあ。

信立。

信立も今宵は飲みあかさうよ。

(信立はかはらけを把りて、小姓に酌をさせる。皆々は顔を見あはせて不安の體なり。)

幕

唐人塚

大正七年十二月作。

大正八年一月。明治座初演。

初演當時の主なる役割——項羽、陳仁謝（市川左團次）虞美人、遊女連山（市川松萬）呂馬童（市川三升）堺屋長四郎（市川壽美藏）など。

登場人物——楚の項羽。虞美人。呂馬童。清國商人陳仁謝。長崎の遊女連山。唐物商人長四郎。ほかに仲居。若い者など。

(1)

（楚の城内。三方は壁にて、正面の奥のかたと下の方とに帳をかゝげたる出入口あり。舞臺の中央に卓を据ゑ、卓の左右には榻あり。）

唄 さるほどに、漢楚の國争ひ、天命やうやく定まりて、敵は城下に充ち満ちたり。十重廿重の圍みをかけ破りて楚の項羽、大童になつて走せ歸る。

（下のかたより楚の項羽、鎧をつけて矛を持ち、惣身に矢を負ひて、大童になつて走り出づ。）

項羽。虞美人やある。項羽が戻りしぞよ。  
唄 大音聲に呼はれば、錦の帳あけ暮に、戀しき君がおもかけを、忍ぶにあまる物思ひ。

唐人塚

(奥より虞美人は唐團扇を持ち出て出づ。)

虞美人。 お、わが君。恙なく御歸城ましましてしか。

項羽。 兵はすくなく、食は乏しく、かく八方を取圍まれて、むなしく居縮みになることの無念さに、われから逆寄せに討つて出で、片端より蹴破り、追ひまくつて、さんぐくに闘ひしが、敵は眼にあまる大軍。味方は飢ゑて疲れたれば、深入りもならず、長追ひもならず、よきほどに追ひ捨て、引返した。それでも敵に一泡吹かせ、すこしは胸も晴れたるわ。

虞美人。 それはお手柄。さるにても鎧にあまたの矢を負うて、もしや御身にお怪我でも……。

項羽。 (笑ふ。) は、何のこれしきのへろく矢、この項羽の骨に立たうか。數刻の働きで喉が湯く、酒を持って。

虞美人。 はあ。

唄。 あゆむ姿も影瘦せて、秋のともしび細々と、消ゆる間近き夜の風。

(虞美人は團扇を卓に置き、打沈みながら奥に入る。項羽は榻にとつかと腰をおろす。)

項羽。 われ軍を起してより八年、先づ秦をほろぼして國の仇を報ひ、さらに漢と戦つて天下を争ひ、大小七十餘度のたゝかひに、曾て一度も敗れを取らず。馬の頭の向ふところ、みな蹴

破つて通りしに、今や勢ひ縮まりて、この城下に圍まるゝこと、わが戦ひの罪にあらず、正しく天命とおほえたり。悔むは愚かと思へども、さりとは無念や口惜しや。

唄。 目眦を裂く忿怒の顔色、阿修羅もかくやと怖ろし。うらみも戀も人の世も、今宵ひと夜を名残ぞと、胡蝶も春の夢さめて、翅も力なさけ無き。

(虞美人は酒壺と杯をさげ出づ。)

虞美人。 君にも知らし召さるゝごとく、糧の盡きたるきのふ今日、お肴の用意もござりませぬ。

項羽。 肴は兎もあれ、早う酒ぢや。

(項羽は酒をつがせて快げに飲む。)

項羽。 そちも飲め。

虞美人。 はあ。

唄。 むかしは玉のさかづきも、今は碎けて土となる、身の行末も思はれて、とめ兼ねたる一としづく。

(項羽は酌をして、虞美人は飲みながら泣く。)

項羽。 そちは泣くか。この項羽も今宵はなんとなく胸が迫つて、母のふところに抱かれた昔のや

うに、泣いて甘えたいやうな心がする。この涙がなぜ流るゝか。くろがねの心もおのづから春の氷のやうに解けてゆく。われの終りももう近いたか。虞美人、そちは察して居らうな。

虞美人。

もう覺悟して居りまする。

唄 唄 同じうき身をかこち合ふ、野邊の尾花と鬼芒、からむ袂もうら枯れて、衣手寒き村時雨。

(虞美人はひざまづきて項羽と別れを惜む。)

項羽。

名残はなか／＼に盡きねども、もう一度駆け出でて最後の運を試めさん所存。先づそれまではあれにて暫時休息せん。そちも別れに一曲舞はぬか。

虞美人。

舞ひまする。なんなりとも……。

項羽。

おゝ、劍をぬいて舞へ。われはあれにて見物せうぞ。(起ち上りて空をみる。) あれみよ。銀河ながるゝ秋の夜に、赤き星の唯ひとつ、長き尾をひいて北より飛ぶは、將星の地に殞つるとおほゆるぞ。

唄 唄 矢竹ごころの張りも抜け、奥の一間へ入りければ、虞美人はうろ／＼と、また悲しさも

彌増して。

(項羽は劍を解きて虞美人に渡して奥に入る。)

虞美人。

かたむく御運と云ひながら、四百餘州にたくひなき、勇猛無双の我君も。

唄 唄 今は雉子の草がくれ、逃るゝ方もあらし吹く、落葉と共に果敢なくも、散らせたまふか悲しやな。

虞美人。

わらはは甲斐なき女の身、捨つるはさら／＼惜まねど、君をこのまゝやみ／＼と、ほろほすが怨めしい、お悼はしい。

唄 唄 身を投げ伏してぞ泣きわたる。

(下のかたより呂馬童、馬飼のすがたにて鞭を持ち出て。)

呂馬童。

殿やおはす。申上ぐるごとの候ふぞ。

虞美人。

おゝ、呂馬童。つか／＼とこゝへ何しに來やつた。君はあれに御休息。御用あらば妾がお取次ぎ申しませうぞ。

呂馬童。

さらば虞美人、聞しめせ。

唄 唄 君が乗馬の望雲驪、一時に百里を走り、一日に千里をかける。

唐人塚

呂馬童。

世にたぐひなき駿足なりしに、如何はしけん膝を折り。

唄 打てどあふれど一足も、あとへも先へも動かばこそ、鬣毛を垂れしをくと、唯うづくまるばかりなり。

呂馬童。

あまり不思議に存じますれば、この由とりあへず言上申す。

虞美人。

望雪騷はきこゆる名馬、君の寵愛浅からざりしに、今この際に膝を折りて、一足も進まめとは……。

呂馬童。

合點のゆかぬことでござりまする。

虞美人。

畜生にも心あつてか。

呂馬童。

え。

(奥にて項羽の聲きこゆ。)

項羽。

虞美人、舞はぬか、項羽が歌ふぞ。

虞美人。

はあ。

(奥にて歌ふ聲きこゆ。)

唄 力拔山兮、氣蓋世。時不利兮、騷不逝。騷不逝兮、可奈何。虞兮虞兮、奈若何。

唄 劍のひかり稻妻や、やがてぞ消ゆる露の玉の緒。

(暗中に舞臺一轉す。)

(11)

長崎丸山の揚屋。二重屋體にて、正面の上のかたに床の間あり。つゞいて出入りの襖あり。床には異國風の置物などあり。軒にも異國風の燈籠をかけ、すべて一種の異國情調を見るべし。こゝは離れ座敷のこゝろにて、庭には梅の立木、石燈籠とび、石などあり。文政八年正月四日の午後。

(舞臺明るくなると、すぐに竹本の淨瑠璃になる。)

淨 日本、みなみの國も春淺く、梅に寒さの離れねば、長崎の日も短かくて、軒端に來鳴く鶯も、ねぐらへ歸る夕まぐれ。

(下のかたより庭傳ひにて仲居お秀は水を入れたるギヤマンのコップを盆にのせて出づ。)



お秀。先ほど水をといた御注文がござりましたに、あちらの御座敷が取込んで居りましたので、ついで遅くなりました。(屏風の外より聲をかける。)もし、陳様。お休みでござりますか。お、なにか魔されてござるやうな。もし、陳様。

(縁に上がりて、立廻したる屏風をあくれば、清國の商人陳仁謝、廿七八歳、風采堂々たる美丈夫、杯盤を列べたるシツホク臺に倚りかゝりて眠りゐる。)

お秀。もし、もし、お目をお醒ましなされませ。

仁謝。(むき直る。)お、夢か。わしは先刻から好い心持にうとくとこゝで眠つてしまつたと見える。

お秀。なにか大層うなされておいでなされました。

仁謝。うなされてゐたか。さうかも知れぬ。(コップの水をのむ。)連山はまだ戻らぬか。

お秀。毎年のことながら、踏繪の暇取るにも困ります。が、もう七つには屹と済む筈。連山さんもやがて戻つて見えるでござりませう。御退屈でももう少しお待ちくださいませ。

淨。挨拶なかばに庭つたひ、堺屋のあるじ長四郎、色青ざめてぞ入り来る。  
(下のかたより堺屋長四郎、廿二歳、社評、年始廻りのこしらへにて脇差をさし、仲居お里に案内)

されて出づ。

お里。陳様の御座敷はあれでござります。

仁謝。お、堺屋どの。

長四郎。御めんなされ。(縁にあがる。)

仁謝。これ、早う酒の支度を……。肴もなにか新しく見繕うて来てくだされ。

お秀。はい、はい。(二人は行きかゝる。)

長四郎。いや、いや、それには及ばぬ。わしは陳さんに少し内密の相談がある。呼ぶまでは遠慮してゐてくれ。これは年玉のおしるしぢや。みんなで好いやうに分けてくれ。

(長四郎は紙入より紙づゝみを出してお秀に渡す。)

お秀。ありがとうございました。いづれ皆なと一緒にあらためて御禮に出ます。

お里。では、御ゆつくりとお話しなされませ。

(お秀とお里は挨拶して下のかたに入る。)

仁謝。堺屋どの、正月も正月、まだ松の内ぢやと云ふに、なぜ春らしく酒でもまゐられぬ。みれば顔の色も青ざめて、こりや飲み過ぎの二日酔かな。

長四郎。

淨 云はせもあへず、長四郎は膝突つかけ。

一年一度のめでたい正月に、屠蘇一滴も喉へ通らねば、去年の暮から持ち越した二日酔い。あまりに酔が強過ぎて、前後正體をうしなひさうな。春らしく酒でも飲めとは何の口で云はるゝぞ。生きてゐるうちは人間の義理、出入りの諸屋敷、唐人屋敷、仲間内の附合ひに元日から年始まはりに出てゐるれど、なにが祝儀やら目出たいやら、こゝろは疾うから死んでゐる。

淨 眼も濡んでぞ見えにける。こなたも左こそと察しやり。

仁 謝、

その述懐は一々道理。それはこなたが云はれいでも、わしもよく察してゐる。併しこなたに比ぶれば、この陳仁謝の苦みは幾層倍。去年の秋の大風雨で、廣東の商人船は三艘ながら海に漂ひ、その一艘は朝鮮へながれ着いたが、その中でわしの荷を積んだ二艘の船はどつちも運悪くゆくへ知れず、人も積荷も諸共に、深い海の底へ沈んでしまつたのであらう。その二艘の船に積んであつたは價の高い焼物、珊瑚珠、麝香、絲のたぐひ、金にかへたら何萬兩といふ代物。一錢も取らずに龍宮の進物にしてしまつては、膽の太い唐の商人も眼が眩む。それが手違ひのはじまりで、不運といふ不運がそれからそれへと覺まつて來

長四郎。

ては、張良孔明の智慧でももう叶はぬ。商賣のかけひきは戰場も同様、孫吳の秘術を振つて闘つても、六韜三略の種が盡きた。したがつて同國の仲間にも義理をかき、日本の取引先へも迷惑をかくる……。

え、その言譯はもう聞き飽きた。廣東船が難船の講釋、今あらためて聞きにはまるらぬ。去年の夏からこなたに用立てた一萬兩、勿論積荷を引き當てに無利息で貸した金、云は、半口乗つた商賣、損も得も時の運とあきらめねばならぬ所なれど、あきらめられぬ長四郎の身の上、去年の大晦日が命の瀬戸と覺悟をきめてゐるに、正月も四日まで生きのびて、今年の初日の出も無事に拜んだは身の仕合せ。三が日の濟むまでは預けて置いたこなたの命を、けふといふ今日は賞はにやならぬ。

淨 思ひ切つたる顔色にて、刺し違へんづありさまなり。

(長四郎は詰めよる。)

仁 謝。

堺屋には何をあわつる。氣の早い日本人、商賣の恨みで人を殺すか。

長四郎。

おゝ、殺さずに置かうか。助けて置かれうか。この長四郎、むかしは堺屋の奉公人、丁稚のときからの辛抱が御主人の目がねにかなうて、一昨年の春から婿養子に引きあけられ、

唐人塚

こゝろの廣い御主人夫婦は株家督一式を他人の養子に惜氣もなくゆづり渡して、銅座間に御隠居なされた。丁稚あがりの長四郎を大家の婿養子にするについて、親類達の故障、世間の蔭口、それを見ぬ振り聞かぬ振りして、長四郎ひとりを引き立て、くだされた御主人の御恩、ありがたい忝けないと思ふにつけて、今にみよ、堺屋の身上を十倍にも百倍にも盛りあけて、世間の奴僕にも見知らしてくれうと、一途に燥つたが若氣のあやまり。こなたが仕込みの金に半口乗つて、取返しも付かぬ大きな損耗。一萬兩なけ出してもすぐに潰る堺屋の身上ではなけれども、家督をゆづられて丸二年とも立たぬうちに、これほどの大損を仕出しては、養子親の御主人の手前、親類の手前、世間の手前、この長四郎が生きてゐられうか。

仁謝。

聞けば聞くほど切ない羽目ぢや。なるほどわしがこなたに勸めて、一萬兩の金を出させたに相違ないが、商賣の損耗はたがひの不運。わしが巧んだことでもないに、人を殺して身も死ぬる。さりとては無分別な。筋ちがひに人を恨むまいぞ。

長四郎。

もとよりこれは不時の禍。こなたに罪のないは能う知つてゐれど、もう斯うなつたら逃れぬ因果ぢや。長四郎に損させたこなたを殺して、わしもすぐに自害する。覺悟おしやれ。

仁謝。

脇差の柄握りしめ、斬らうか突かうか、突き詰めた男の覺悟。  
え、聞き分けのないあばれ者、唐人と侮つて後悔するな。もろこし傳來の拳法を、おれはよう知つてゐるぞよ。

長四郎。

町人でも日本人。  
おのれ殺さずに置かうかと、睨み合つて立つところへ、連山あわて走り寄り。

連山。

（下のかたより遊女連山、十九歳、踏繪にゆきたる道中の盛装にて、若い者藤助に手をひかれて出で來り、この體をみて下駄をぬぎ、素足にて縁先へ走りゆき、二人のあひだへ割つて入る。）  
なにかは知らねどお二人さん、まあ、待つてくださりませ。

長四郎。

え、邪魔な。退いてゐろ。  
又立ちかゝるを押隔て、ぬけつくゞりつ争へば、若い者もかけ寄つて、無理に一人を押据ゑる。

連山。

（長四郎は連山をつき退けて、また斬りかゝらんとするを、藤助も駈け寄りて、長四郎をうしろより抱きすくめる。）  
ふだんから仲のよいお二人が、初春の屠蘇機嫌か、みれば堺屋どのは腰の物に手をかけて

唐人嫁

仁 謝。 陳さんを斬らうとか。あぶないことぢや、お止しななせ。  
 酒に酔うたか気が狂うたか。堺屋はわしに喧嘩を賣りに来たのぢや。  
 長四郎。 お、云ふまでもないことぢや。

藤 助。 (又寄らうとするを藤助はおさへて、縁側に押据ゑる)  
 もし、堺屋の旦那様。どういふ筋か存じませぬが、初春の御祝儀に劍の舞は、あんまり野暮でござります。まあ、まあ、お鎮まりなされませ。

長四郎。 でも、このまゝでは……。  
 (又寄らうとするを藤助はおさへ、連山は隔てる。)  
 仁 謝。 これ、堺屋どの。かう邪魔が這入つては思ふまゝにもなるまい。けふはおとなしく歸つては何うぢやな。

長四郎。 むゝ。  
 仁 謝。 松でも過ぎたら又お來やれ。(冷笑ふ。)  
 長四郎。 そのとき卑怯に隠れまいぞ。  
 藤 助。 はて、もうおいでなされませ。

淨 花にあらしの喧嘩客、座敷の邪魔と連れてゆく。あとは俄にひつそりと、入相告ぐる鐘の聲。

仁 謝。 (時の鐘。陳仁謝と連山は足をはたきて縁にあがる。)  
 お、もう日が暮るゝか。

お 秀。 (奥より仲居お秀は燭臺を持ち出て出づ。)  
 仁 謝。 お、連山さん。今お歸りでござんしたか。(軒の燈籠にも灯を入れる。)  
 酒を早う持つて來てくだされ。

お 秀。 はい、はい。  
 (お秀は奥に入る。)

仁 謝。 けふの踏繪は賑かいことであつたらうな。  
 連 山。 いつもながら賑かいこととござんした。切支丹あらためは年々のこと、その宗門でもないわたし等は、キリストとやらマリアとやらの、繪像を踏まうが足蹴にせうが、なんの遠慮はない筈なれど、かりにも神とか名の付く人。



連山。

して、その工面が吃と出来るのでござんすかえ。

仁謝。

さあ、出来るやら出来ぬやら、それは歸つて見ねばわからぬ。出来ぬところをも無理に工面して、相當の資本を作つて歸らねば、この店は見すく潰れる。店をつぶせば同國人ばかりか、日本人、和蘭人、異國の人々にも義理をかく、それが氣の毒、恥かしい。まこと云へば、めづるの塚屋は、わしの命を取りに來た。

連山。

え。

仁謝。

塚屋は正直な若い男、突きつめて死なうとしてゐる。助けたいにも金がない。いつそあの男の短刀で。

胸のまん中を抉られたら、この苦みはあるまいもの。

仁謝。

とは思ひながらも、いざとなれば死にともなさに手向ひする。生きたいやうな死にたいやうな、自分で自分のころが判らぬ。

推量せよと云ひければ、女もいと胸せまり。

連山。

去年の秋の難船から、ゆき詰まつたお前の身の上、わたしも疾うから知つてゐる。けふも踏繪に行つた時、陳さんはあのやうな店構へをしてゐるれど、内証はもう左り前、去年の大

晦日がよくも無事に越せたことぢやと、廓の人たちの陰口を聞いてゐる悲しさ恥かしさ。萬人に踏まれるは切支丹の繪像ばかりでない、わたしの顔も踏まれたやうな。その泣顔をかくして歸れば、こゝでも塚屋さんの揉め擲着。出るにも這入るにも胸の痛むことばかり、わたしに推量せよといふ口で、お前もわたしが此頃の苦しさを、少しは察してくださいませ。

仁謝。

察してゐればこそ何も彼もけふは正直に打明けた。もう打明けねば濟まぬ場合。なじみの客がおちぶれても、日本同士ならば又格別で、朋輩にも涙をかけられ、廓の人にも氣の毒がらるゝ。異國の男となじんだのがお前の因果、かうした時にはそれ見よと笑はれ草になるばかり。唐日本の土を踏まへて何萬兩の大商ひする陳仁謝が、運のきはみで女ひとりに生恥をかゝすが口惜しい。

齒を食ひしめて泣きければ、女もおなじ涙にくれ。

連山。

おまへは唐土、わたしは日本、繪圖では近いやうなれど、三千餘里のあなたとは。

國姓爺の淨瑠璃でも聞いてゐる。うまれた國は違つても人情に隔てはない。たがひに逢ひ染め馴れそめて、はや何年になることぞ。

唐人塚

連山。

今度故郷へ歸つても、思ふにまかせぬは金のこと。工面のできぬ曉は。

淨 〽もう日本の長崎へ、再び歸る心はあるまい。取残されていたづらに、歸らぬ人を松浦湯。

連山。

あの佐用姫になれとてか。

淨 〽悲しいむごい慘らしい、わが身の果やと掻き口説けば、男も弱るばかりにて、身は空蟬

のから衣、涙をぬぐふ袂さへ、みじかき縁ぞ哀れなる。

陳仁謝もちつと俯垂れてゐる。奥より仲居のお秀とお里とは酒肴を運びて出づ。奥にて下方入り

の鳴物きこゆ。

お秀。

どうも遅くなりました。

お里。

おあかりが暗ければ、燭臺をもう一つ持つてまゐりませうか。

仁謝。

いや、いや。それには及ばぬ。

お秀。

では、お酌でも……。

（お秀は陳仁謝に酌をする。）

仁謝。

賑やかな鳴物がきこゆるやうぢやな。

お秀。

おかけさまで春は賑かでございます。

連山。

ほかの御座敷が忙がしからうに、こゝには構はずに早う行きなんせ。

お秀。

では、これで御めんを蒙ります。

お里。

御用があつたらお呼びくださりませ。

（お秀とお里は奥に入る、鳴物の音つゞけて聞ゆ。）

連山。

ほんにお里さんの云つた通り、あかりが暗いやうでござんすな。（燭臺の心を切る。）

仁謝。

暗ければ暗いでよい。（コップを持ちながら唄ふ。）燭は暗し數行眞氏の涙、夜は深し四面楚歌

の聲。城下で敵にかこまれて、眞美人と唯ふたり。暗い燈火の下に楚人の歌を聞いた項羽

の愁ひも、今はわが身に思ひあつた。

連山。

わたしには些ともわからぬ。それは何ういふことでござんすえ。

仁謝。

日本の女子などは知らぬこと。むかし唐土で漢といふ國と楚といふ國と戦うたことがある。

そのときに楚の王の項羽が負けて、城下の城に楯籠つて、敵に四方を圍まれながら、寵愛

の妾眞美人と別れを惜んだといふ昔話を、誰やらが歌うた詩ぢや。

連山。

して、その二人はどうなりました。

仁謝。

項羽は目ざましい働きをして、みづから頸を刎ねて死んだといふ、また眞美人は劍をわが

胸に突き立て、……。

連山。

そんなら潔よく自害して……。女でこそあれ、勇ましい死様でござんすな。

仁謝。

その女の血の流れたあとに、あくる年から美しい紅い花が咲いたので、それは虞美人の魂ぢやと、見る人々が哀れがり、今の世までも虞美人草といひ傳へてゐるのぢや。

連山。

して、それはいつ頃のこととござんすえ。

仁謝。

さあ、わしも詳しいことは知らぬが、なんでも二千年ほどの昔であらうよ。それほどの遠い昔のことを、わしは唯つた今ありくと夢にみた。

連山。

え。

仁謝。

おまへが踏繪から歸るのを待つてゐる間、こゝにうたゝ寐をしてゐると、彼の項羽と虞美人が垓下の別れ、その悲しい勇ましいありさまを、夢かうつゝか確かに見た。

連山。

ならほどそんなことが無いとも云はれぬ。もしやそれが正夢では……。

仁謝。

え。

連山。

浄 庭の隅々、座敷の奥、心を配り眼をくばり、男のそばへ措寄つて。

連山。

(連山はあたりを窺ひて、陳仁謝のそばに寄る。)

もし、陳さん。今お前が夢にみたといふ虞美人とやらの悲しい勇ましい話。そのやうな女

浄 子は唐ばかりでない、日本にもあると思はんせ。おまへが今の身の上は。

連山。

浄 垓下とやらで軍に負けた、唐の大將も同じこと。

一緒に死んで次の世には、美しい花と生れかはずた、唐の美人が羨ましい。

浄 わたしもその花になりたいと、聲忍ばせて泣く涙。錦の袖にはらくくと、この世からなる花の露、ぬれて色増すばかりなり。

仁謝。

いや、由ない話を仕出して、人のこゝろを狂はする。もうそのやうな話は止めにして、さあ、酒にせう。春の色町で陰氣らしく、沈んでばかりもゐられまい。藝者仲間を呼んで騒がう。

連山。

それも好うござんせう。(思案して)わたしも道中のこの姿では窮屈、部屋へ行つて着物を着かへて来るほどに、しばらく待つてゐてくださんせ。

仁謝。

お、ゆつくりと着換へて来やれ。

連山。

(起ちあがる。)もし、陳さん。今おまへに聞いた花の名は。

唐人塚



仁 謝。

花の名は虞美人草。

連 山。

おゝ、虞美人草……。紅い花でござんしたな。

仁 謝。

む。

浄 かくれなるの花の名も、わが身の上と思ひつめ、二世とこの世を隔ての襖、あけて云はれぬ暇乞ひ、顔をそむけて入りにけり。

(連山はゆき兼ねて猶豫ひしが、思ひ切つて奥に入る。)

浄 長四郎は一徹者、一旦は歸るとみせながら又引返して庭つたひ、足をぬすんで忍び寄る。

(長四郎は社杵をぬき捨て、尻を端折りて手拭に額をつゝみ、下のかたより再び窺ひ出づ。)

浄 こなたは眼ざとく透し見て。

仁 謝。

誰ぢや、顔をかくして忍んで来たは。

長四郎。

だまし討はせぬ。(手拭をとる。) 塚屋の長四郎ぢや。

仁 謝。

おゝ、塚屋。また来たか。

長四郎。

今度こそは逃さぬぞ。

(長四郎は脇差をぬきて斬つてかゝり、陳仁謝は拳にて突きながら防ぎ、ふたりは庭へ飛び降りて

闘ふうちに、長四郎は陳仁謝を一太刀突き、陳仁謝は庭に倒れる。)

仁 謝。

おのれ、どうでもおれを殺すか。

長四郎。

筋違ひと恨まば恨め。長四郎の一分立てた上で、おれもこの場で立派に死ぬのぢや。

仁 謝。

なんの、おのれに……。

(陳仁謝は起たうとして又倒る。奥より連山は桶橋をぬぎ、短尺を手に持ちてよるめき出づ。)

連 山。

もし、陳さん。おゝ、お前までがその體は……。もし。

浄 云ふも苦しき息つかひ、長四郎は合點ゆかず。

長四郎。

また邪魔に來たと思ひの外、顔の色といひ、息つかひ、どうやら仔細のありさうな。

連 山。

仔細はこれに……。もし。

浄 縁より這ひ降り轉び降り、ふるふ手に持つ短尺を、男の前にさしつくれば、長四郎は早

速の機轉、釣燈籠を取りおろし、おほろに照す文字の綾。

(連山は苦痛を堪へながら、縁より庭に降り立ちて、持つたる短尺を陳仁謝にみせる。長四郎はのぞいて見て、暗くて讀めぬといふこゝろにて軒の燈籠に眼をつけ、それをおろして來て照して見せ

る。)

仁 謝。唐衣きつ、馴れにし人に別れ……。

長四郎。ながらへて何どつまを重ねん。

仁 謝。あゝ、そんなら別れを悲んで……。

連 山。異國のお客から貰うた南蠻の毒藥。鼠取りにと仕舞つて置いたが、はからず今夜の役に立つて……。

長四郎。そんならこなたは毒藥を……。

淨。呆れて詞もなかりけり。女は手負に取りついて。

連 山。もし、陳さん。おまへに教へて貰うた虞美人草の由來、悲しいやうで羨ましく。

仁 謝。お前もその花にならうとか。虞美人草ばかりでなく。

淨。やまとの撫子も紅く咲く。なさけの露の身にしみて。

仁 謝。これ、禮をいふ、嬉しいぞよ。急所を突かれた深手では、わしも所詮生きられぬ。

連 山。そんならお前も……。

仁 謝。さつきの夢をそのまゝに、虞美人も死ぬ。項羽もほろぶる。

連 山。この長崎にも來年から紅い花が咲きませうぞ。

仁 謝。堺屋は早うゆけ。人の見ぬ間に早うゆけ。

長四郎。いや、人を殺せば身も死ぬる。この長四郎も覺悟の上。

淨。落ちたる刀をとりなほせば、陳仁謝は氣をあせり。

仁 謝。はて、わからぬ男。陳仁謝はこなたに殺されたのでない。連山と共に死ぬるのぢや。

長四郎。え。

仁 謝。日本の女のなさけを見て、おめく、生きてゐられうか。所詮死なねばならぬ唐の男に、義

理を立て、なんとなる。素知らぬ顔で、早う、早う。

長四郎。でも、このまゝに見捨てゝは……。

仁 謝。えゝ、いつまでも氣を揉ますか。

淨。吐り立てられ追ひたてられ、今ぞ生死の堺屋は、涙ながらに手をあはせ。

(陳仁謝は手を掉りて早くゆけと云ふ。長四郎も餘儀なく納得する。)

卑怯なやうでも生きながらへ、唐日本の二人のために、追善供養はわしの役。

仁 謝。なにとぞ頼む。

連 山。堺屋どの。

唐 人 塚

長四郎。

心残さず……。

二人。

おゝ。

淨  
 手に手ひかれて迷ひゆく、未來の闇と戀路のやみを照らす燈籠消えんぐに、消えてあと  
 なき春の霜、大和撫子唐なでしこ、一度に散るや夜の風、無常の風こそ果敢なけれ。  
 (陳仁謝と連山は這ひよりて手を取る。長四郎は燈籠をさしつけて二人の顔を見せてやる。ふたり  
 は手を取りしまゝにて落ち入る。長四郎はなみだを拭ふ。床の三重、時の鐘。)

幕

景

清

大正四年十月作。

大正四年十一月。新富座初演。

初演當時の主なる役割——平靖清（市川左團次）飛驒次郎（市川荒次郎）伊賀十郎（市川蓮升）平教盛（市川市十郎）平經房（市川左升）平行盛（中村又五郎）獵夫準太（市川壽美藏）里の娘乙音（市川松蔭）唐橋の局（岩井余三郎）など。

**登場人物**——中納言教盛。左少辨經房。丹波侍從忠經。左馬頭行盛。備中守師盛。獵夫鳥子の準太。里のむすめ乙音。悪七兵衛景清。飛驒次郎景光。伊賀十郎重家。阿波の内侍。八條の局。唐橋の局など。

(1)

肥後の國、五個の庄の山中。平家の一族のかくれ家。高足の二重屋體にて茅ぶき屋根、丸木の柱、丸木の縁側、丸木の高欄。正面は板戸にて、三方には古びたる簾を垂れたり。縁の下にも岩石、左右にも岩石、所々に杉の大樹あり。下のかたの岩のあひだには小さき山川の流れあり。うしろは一面の深山にて、松杉、紅葉などの林あり。

（時は平家没落の翌年の秋のゆふぐれ。官女八條の局、唐橋の局のふたりは白の小袖にむらさきの

襦をかけ、緋の袴の裾を端折り、ひとり丸木をくりたる桶のやうなものにて粟を洗ひぬる。ひとり山川のながれにて肌着を洗ひぬる。縁の下には枯枝を焚きて、獵夫鳥子の隼太は竹籠に入れたる穂粟を焼いてゐる。縁の上には左馬頭平行盛、廿二歳、丸木の柱によりて笛を吹いてゐる。水の音きこゆ。

八條。唐橋どの。もうやがて日が暮れまするな。

唐橋。秋の日はみじかいと申しながら、こゝらは取分けて日あしが早いやうに思はれまする。

八條。日かけが薄うなつたらば、急に山風が寒うなりました。

(粟の穂が割れる音に、ふたりは焚火の方をみかへる。)

唐橋。粟はもうみな炙つてしまひましたか。

隼太。はい、あらかたは炙つてしまひました。

八條。それは大儀であつたなう。

隼太。すぐに夕の御膳を召上りますか。

唐橋。さあ、それは行盛の卿に聞いてみやれ。

隼太。はい、はい。(行盛にむかひ。)もし、殿様。粟は炙つてしまひましたが、夕の御膳は如何な

されます。

(行盛はやはり笛を吹いてゐる。)

隼太。もし、殿様。これはしたり、まるで笛で夢中になつてござるわ。もし、殿様。(籠をみせる。)

粟がもう焼けました。

行盛。(はじめて見返る。)はて、さうぐいしいことぢや。一昨年の秋は豊前の柳ヶ浦に船がかりし

て、君すめばこゝも雲井の月なれど猶戀しきは都なりけりと、歌に思ひを寄せたるも、今

はむかしとなり果てた。その昔の夢を忍ばうとて、心しづかに吹きすましてゐるものを、

さりとは邪魔な奴め。控へてゐやれ。

隼太。はあ。

(行盛は再び笛を吹く。悪七兵衛景清、廿八歳、藤蔓を張りたる弓を持ち、矢をたづさへて先に立

ち、家來の飛騨次郎景光、伊賀十郎重家の二人は大いなる猪の四足を藤蔓にて縛り、木の枝にかけ

て荷ひ来る。)

景清。(笛の音に耳をかたむける。)また笛か。いまの身の上と相成つても、平家の公達はむかしの癖

が失せぬよなう。

景清

八條。

（景清は苦々しげに呟きながら縁さきに来る。）  
おゝ、景清。戻つたか。

唐橋。

けふはよい獲物でもあつたかの。

景清。

これ御覽じませ。山の主かと思はるゝほどの大猪を見ごと一矢に射止めてまりました。

隼太。

（起つてみる。）なるほど、これほどの大物をたゞ一矢にてお射止めなさるゝとは、さすがは景清様の御手の内、恐れ入つてござります。

景清。

次郎、十郎。

二人。

はあ。

景清。

猪は皮を剥いで晒しておけ。肉は炙つて方々が今夜の御膳にそなへたい。すぐにその支度をいたせ。

二人。

心得ました。

景清。

隼太は斯様のことに馴れて居らう。一緒に手傳うてやれ。

隼太。

はあ。

（景清は先に立ち上のかたへ行きかけしが、また立戻る。）

景清。

行盛の躰（大きく呼ぶ。）

行盛。

（笛をやめる。）おゝ、景清か。なんぢや。

景清。

笛を吹くことお止めなされい。平家没落も一つはその笛のためぢや。一の谷でも夜もすがら管絃を催し、唄ひ興じてるうちに敵は不意に寄せてまゐつた。

行盛。

（打笑みて。）それは過ぎし昔のことぢや。今はうき世を離れた深山の奥、誰を恐るゝこともあるまい。

景清。

鐵拐ヶ峰、鴨越すらも逆落しに寄せて来た源氏ぢや。かやうな險阻な山奥へもいつ押寄せて来ようも知れませぬ。鹿笛には牡鹿が寄る、その笛の音にはおそろしい敵が寄つて来ませうぞ。現にこの間もこの隼太のやうな奴がたづね寄つたではござらぬか。女房たちも心して、迂濶なものを川へながしては相成りませぬぞ。

八條。

先度の粗忽に懲りたれば、箸ひとつ洗ふにもかならず桶へ水をくんで、丁寧にあつかうて居りまする。なう、唐橋どの。

唐橋。

ほんにさうぢや。塵一つでも川下へは流し遣らぬやうに、くれぐれも氣をつけて居りまする。

景清

景清。

かへすくも用心が大切でござるぞ。

(景清は先に立ち、景光と重家とは猪を荷ひ、準太もあとにつきて去る。)

八條。

どれ、わらはも奥へまるつて、粟を炊ぐ用意に取りかゝりませうか。

(八條の局は桶に粟を入れて、下のかたの奥へ運びゆく。唐橋の局も肌着を持ちて行きかゝる。)

行盛。

あゝ、これ、唐橋どの。いつの間にか日も暮れた。やがてもう月も出るであらう。あれ、

あの峰にかゝる冴けき月を仰ぎながら、お身と一緒に笛を吹かうよ。

とは云へ、又あの景清が吐りませうぞ。

唐橋。

はゝ、かれは彼、我はわれぢや。今の行盛に取つては、笛はわが友。

行盛。

わらはは……。

唐橋。

妻ぢや。

行盛。

(ふたりは顔を見あはせて打笑む。山風の音きこゆ。下のかたより丹波の侍従忠經、三十餘歳。備中守師盛、廿餘歳。いづれも刺貫をくゝりたるやうな姿にて、忠經は柴を背負ひ、師盛は鉞をかつぎて出づ。)

唐橋。

おゝ、忠經の卿に師盛の卿、今お歸りでござりましたか。

行盛。

さぞお疲れでござつたらうなう。

忠經。

いや馴れぬ當座は肩も凝り腕も痛んで、随分難儀でもござつたが、數ふれば最早あしかけ

二年、日毎日ごとの柴刈る業も、馴れてはさのみ苦にもなりません。なう、師盛の卿

師盛。

持ちも習はぬ鋤鎌をとつて、田畑をたがやす百姓仕事も、このごろでは却つて面白うなり

ました。はゝゝゝ。

忠經。

習はうよりも馴れよとは、まことにこの事でござらうよ。

師盛。

都そだちの我々も、かやうな山家に住み馴れると、格別不自由とも難儀とも思はぬやうに

なります。

行盛。

翌はそれがしが柴刈りに行く番ぢや。忠經の卿は一日休息せられたがよいぞ。では、後刻

お目にかゝらう。おゝ、いつの間にか焚火が消えた。誰かある、篝を焚け。

(云ひすて、奥に入る。忠經と師盛は上のかたへ、唐橋の局は下の方にわかれて去る。山鳩の聲さ

びしく聞ゆ。里のむすめ乙音、十七八歳、腰巾をつけ、草鞋をはき、山刀をさして窺ひ出づ。)

乙音。

今きこえた笛の音は、たしかにこゝらに相違あるまい。妻戀ふ鹿の聲ではなし、どうでも

人の吹いた笛ぢや。はてなう。

景清

(乙音はあたりを窺ひながら縁さきに来る。)

乙音。

おゝ、こゝにこのやうに大きい家がある。昔からおそろしい魔所と聞えたこの山奥に、人間の棲んでるよう筈がない、不思議なこともあるものぢや。(怖る怖る内をのぞく。)おゝ、奥には大勢の人がる様子。いや、いや、人ではあるまい、もしや鬼の棲家では……。(引返さうとして立止まる。)とは云へ、折角こゝまで尋ねて来ながら、今更怖さおそろしさに、逃けて歸つてなんとならう。こゝの様子を探つてみたら、隼太殿のたよりが判るまいものでもない。さうぢや、怖いことも何にもない。

(乙音は覺悟をきめて再び縁先に来り、内をうかがふ。)

乙音。

もし、御免下さりませ。もし、もし、どなたぞおいでなされませぬか。(呼ぶ。)

(上のかたより隼太は篝火を運び出て、縁の下に置く。乙音は透しみて走り寄る。)

乙音。

おゝ、隼太殿ではござらぬか。

隼太。

え。(乙音の顔をみる。)や、おまへは乙音、どうして来たのぢや。

乙音。

お前、まあ好う生きてゐてくださった。(取纏りて泣く。)

隼太。

わしがこゝにゐることを何うして知つた。誰が教へた。

乙音。

教へてくれる人があるほどなら、今まで尋ねて来ずにもませうか。先月のはじめに山へ這入つたぎり、一月あまりも便りは無し、山の神の祟りで谷へでも滑り落ちたか、それとも手負猪の牙にでもかゝつたか、所詮生きては歸るまいと、里ではみんなが噂するのを、聞きたび毎にわたしの悲しさ。泣いて泣き盡した果の果が、いつまで斯うしてゐるよりも、どんなおそろしい魔所でも悪所でも絶所でも、奥の奥まで分け入つて、おまへの安否をたづね出さうと、きのふの朝から家を出て……。

隼太。

おゝ、若い女の身一つで、ようまあこゝまで来られたものぢや。

乙音。

片山里に育つた者でも、これほど険しい山奥を夜も晝もさまよひ歩いた艱難苦勞は、隼太どの、察してください。木の根や岩角につまづいて、足からは血がながれる。ある時は山霧につままれて、西も東も方角は知れなくなる。用意して来た糲も盡きてしまつて空腹うはなる。足は痛む、眼はくらむ。

隼太。

さうであらう、さうであらう。男の私ですらもこゝまで来るのは容易でなかつた。

乙音。

それでも人の一心はおそろしいもの、たうとう斯うしてたづね當てた。嬉しい、嬉しい、こんな嬉しいことはござらぬ。戀しいお前の顔を見て、張りつめた氣が弛んだやら、わた



しは何だかうつとりして……。

隼太。

これ、待ちや、待ちや。氣をしつかりと持たねばならぬ。わしが今水を汲んで来てやる。

(隼太は下の方へゆきて心づき、また立戻りてそこに散りたる栗の穂の大きいのを拾ひ、山川の水をすくひ來りて乙音に銜ませる。)

隼太。

どうぢや、氣は確かになつたか。

乙音。

あい。

隼太。

(再び水を汲み來たりて飲ませる。)

乙音。

いえ、いえ、それには及びませぬ。先づなによりも聞きたいは、一體お前は どうしてこんな處へ來なされたのぢや。

隼太。

さあ、それぢや。こんな山奥へ來てしまつて、曆も碌々に判らなくなつたが、なんでも前の月の初めとおほえてゐる。わしがいつものやうに獵に出て、この山の中ほどに休んでると、おゝ、丁度この山川の流れの未ぢや。(下のかたを指さす。)

一つの塗椀のやうなものが流れて來た。はて珍しいと拾つてみると、こゝらではつひぞ見たことも無い立派なもの。さあ、どうしても合點がゆかぬ。こんなものが流れて來るのをみると、この川上に人が住

んでゐるのか。(かんがへる。)

ぬ。

乙音。

それでお前は探しに來なされたのか。

隼太。

今更おもへば由ない物好から、わしはこの流れをどこまでも傳つて、奥へ奥へと次第にたどつて來ると、これこのやうな大きい屋敷の前に出た。一體どう云ふ人が住んでゐるのか、仙人のかくれ家か、天狗の住家かと、そつと門から覗いてみると、いかめしい侍のやうな男が四五人ばらくとあらはれて、有無を云はさず私を引捕へて、おのれはどこから來たと嚴しい詮議ぢや。

乙音。

して、その侍とは誰でござるえ。

隼太。

あとで聞けば都の平家の落武者ぢや。

乙音。

あの、平家の方々……。

隼太。

去年の三月に長門の壇の浦でほろびた時、平家の一門のうちでも名ある人達や、これにしたがふ官女や家來衆までが、あやふいところを落ち延びて、この肥後の國の山奥に姿を隠

景 清

してござつたのぢや。

乙音。それからお前はとうしなされた。

準太。再び無事に籠へ歸したら、わしの口からこの隠れ家が世間に洩れるのを氣づかつて、けふ

が日まで囚人同様、逃げれば殺すと嚇されて、もう一生ふる里へは歸れぬものとあきらめ

てゐた。お前も見つけられたら難儀の基ぢや、人のみぬ中に早う歸つたがよいぞ。(左右を

みかへる。) さあ、早う、早う。

乙音。いえ、いえ、かうしてお前のありかゝ知れたからは、捕はれても殺されてもお前と一緒ぢ

や。一寸もこゝは動きませぬ。

(奥にて笛の聲きこゆ。)

乙音。あの笛の音をしるべに、わたしもこゝを尋ねあてたが、あれは誰が吹いてゐるのでござる

準太。

行盛と云はるゝ平家の公達ぢや。かういふ山奥にかくれ潜んでゐても、唐橋の局といふ若

い官女と戀仲で、それはそれは羨ましいほどに仲が好い。

(笛の聲つゞけて聞ゆ。準太はちつと考へる。)

準太。さうぢや。これ、乙音。(さゝやく。)

乙音。そんなら人の見ぬうちに……。

準太。おまへに逢うたので、急に里が戀しうなつた。さあ、早う來やれ。

(ふたりは竊と手をひきて下のかたへ行かんとする時、奥の板戸をあけて、中納言教盛、五十餘歳、

出づ。)

教盛。準太とやら、どこへゆく。

準太。え。

教盛。誰かある。かれらを取押さへい。

(上のかたより飛騨次郎景光、伊賀十郎重家のふたり走り出で、準太と乙音をひき戻す。準太等は

地にひざまづく。)

準太。どうぞお免しくださりませ。

景光。日頃あれほど申聞かして置いたに、われくの隙をみて逃げようとは大膽至極の奴め。

重家。命のないのは覺悟であらう。さあ、尋常にそれへ直れ。

(景光と重家は太刀をぬく。)

景 清

乙音。

あゝ、もし、お待ちくださいませ。

(乙音は支へんとするを、重家は蹴倒す。)

教盛。

いや、景光も待て、重家も控へい。予がすこしく詮議したいことがある。(隼太等に。)こりや兩人、それへ出い。

二人。

はあ。

教盛。

その女子はつひに見なれぬ者ぢやが、いづこの何者ぢや。

隼太。

この麓の鳥子といふ村に住んでる百姓のむすめで、乙音と申す者でござります。

教盛。

そちと何ういふ由縁があるのぢや。

隼太。

え。(乙音と顔を見あはせる。)

教盛。

見たところ、似つかはしい年頃ぢや。かねて女夫の契約でもあるものか。

(ふたりは俯向く。)

教盛。

それで大かた様子もわかつた。男のゆくへを尋ねてまるつたのぢやな。(優しく云ふ。)

乙音。

はい。思へばあはれなものぢや。放して歸しやりたいが、仔細は隼太に申聞かせてある筈。一旦

教盛。

乙音。

こゝへ来た者は、再び世間へは出られぬと思へ。はい。(是非なき體。)

(奥より左少辨經房、六十餘歳、出づ。)

經房。

物さわがしいは何事でござるな。

教盛。

いや、いや、大事ござらぬ。

經房。

はて、見馴れぬあの女子は……。

教盛。

里から新しくまるつた者ぢや。

經房。

なに、里から新しく参つたと……。(乙音を屹とみる。)

教盛。

その懸念は御無用、この女子は別に仔細あつてまるつた者、それは追つてお話し申す。(景

光等に。)それ、その兩人をあれへ連れてゆけ。

二人。

はあ、さあ、行け、ゆけ。

(景光と重家とは先に立ちて、隼太と乙音も上のかたに入る。月あかるく、笛の聲きこゆ。)

經房。

(空を仰ぐ。)おゝ月が出た。茅の軒端に洩る月も又ひとしほの風流ぢや。

(寝鳥の羽音俄にきこゆ。)

景 清

教盛。 や、森の寝鳥が俄におどろき起つは、  
経房。 はて、心得ぬことぢや。

(経房は縁さきに出て見る。下のかたより景清は長巻を持ち出て出づ。)

経房。 おゝ、景清か。得物を掻込んでなんとした。怪しい者でもうかゝひ寄つたか。

景清。(笑ふ。) は、なんの、なんの、今宵はあまりに月がよいので、景清思はず浮かれ出した。

教盛。(笑ふ。) 浮かれ出したとは……。

景清。 久振りでこの長巻を掻込んで、うしろの廣場へ跳り出で、照りわたる月の下で縦横無盡に

ふりまはし。(長巻を振ってみせる。) 果は立木を片端から手あたり次第に薙いでみると、  
寝鳥はおどろく、木の葉は散る、いや、面白いことでもござつた。は、ムムム。

(奥より行盛、忠經、師盛、ついで阿波の内侍、八條の局、唐橋の局出づ。行盛と唐橋とは人々とすこしく離れて縁に坐る。)

行盛。 唯今寝鳥をおどろかしたのは、景清そちの仕業か。よしない悪戯をする男ぢや。

景清。 お前さまの笛よりは優しでござらう。(笑つてゐる。) 八島の磯で三保谷めの太刀を打ち折つ

て以來、この長巻も用のないものになり申した。せめて折々には取出して、腕かぎりに振つて見ぬと、自然に力もおとろへ、腕も鈍り申すわ。

教盛。(矢張り笑つてゐる。) 腕が鈍つてもよいではないか。

景清。 いや、平家再興の時節到来するまで、十分に腕を鍛へて置かねばなりません。

(人々は顔を見あはせて黙してゐる。奥より準太と乙音は木を扱ひたる器に焼栗や猪の肉などを盛り出て出で、ほかに酒とさかづきとを持ち出て出づ。)

阿波。 女子の召使がひとり殖えたので、妾達もこれから幾らか樂になりませう。(乙音にむかひ。)

これ、方々にお酌をしや。

乙音。 はい。山家育ちでござりますれば、禮儀も作法も一向にわきまへませぬ。失禮はどうぞお

免しくださりませ。

八條。 わらは達も今は山家の住居ぢや、都風の禮儀作法などむづかしう云うてはるられぬ。

唐橋。 さあ、遠慮せずに給仕をしてたもれ。

乙音。 はい、はい。

(阿波の内侍は先づ教盛に酌をせよと教へる。乙音は酌に立つ。)

教盛、(一杯のむ。)お、よい味ぢや。木の實ももう好いほどに熟したとみえるぞ。

經房、焼栗に猪の肉を肴として、木の實の酒に酔ふといふも面白い境涯ぢや。

景清、(あざ笑ふ。)面白うござるか。

行盛、景清、今宵は月見の宴ぢや。いつもの理窟めいたことはいふまいぞ。

景清、云ふなとあつても云はずにはゐられぬ。方々とても一生日蔭の身で暮さうとも思はれまい。

もう好いほどにこゝを立退いて、平家再興の旗あけの御用意如何でござるな。

(人々は顔を見あはせてゐる。)

景清、去年三月の廿四日に、平家の一門は壇の浦に沈められ、われ／＼だけが幸ひに落ちのびて

豊前筑前筑後の諸國をさまよひ、この肥後の國の山ふかく分け入つて、五十餘人の人々が

椎原、久連子、椀子、葉子、仁田尾の五か所にわかれ、山林をひらいて田畑を作り、小豆

や稗粟のたぐひを糧として、わづかに命をつないで居るも、それは元より一時のかくれ家

で、時節来らば再び世に出で、平家の旗をおし立つるが各々方の御本意ではござらぬか。

(嘆息して。)われ／＼も初めはさう思つてゐた。

教盛、しかるに此頃のありさまでは、一時の隠れ家が一生の住家と相成つて、ふたゝび世に出る

御所存も無いかのやうに見え申すは、景清無念に存じまする。(乙音にむかひて。)こりや、  
女子、これへまるれ。

乙音、はい。(恐る恐る出る。)

景清、そちはさすがに健氣な者ぢや。聞けば男をたづねて身一つで参つたさうな。(人々にむかひ

て。)いかに方々、かやうな若い女子でも、一念が通ずれば望みをとぐる。人の執念はおそ

ろしいものぢや。われ／＼とても一念癡つたら、きつと望みは遂げられませうぞ。

お身の苛立つも道理ぢやが、かやうな山奥へ追ひ詰められた我々が今更あせつたとて狂う

たと何とならう。

教盛、天下舉つて源氏の旗風になびく今の時節に、なまじひ平家の再興など思ひ立つては却つて

禍をまねく道理ぢや。

行盛、源氏の詮議も流石にこゝまでは届くまい。かうしてゐれば我々の一生は安泰と云ふもので

はないか。

景清、人も通はぬ山中にかくれ忍んで、猪や猿とおなじやうに世を送るが各々方の本意か。方々

には一門滅亡の恨みといふことをお忘れなされたか。さりとは無念、口惜い。(思はず涙を

ぬぐふ。方々には今一度かんがへて御覽せられい。三月廿四日……。あの日の無慚な有様は……。(長巻を把つて起ちあがる。)敵の兵船は三千餘艘、味方の船は千餘艘、壇の浦の沖に乗り出で、源氏平家の國争ひ、けふを限りと闘ひしが、暮れゆく春の日と共に平家は次第にかたむきて、名ある勇士の面々も、こゝに討たれ、かしこに沈められ、主なき船はゆふ潮にゆくへも知れず流れゆく。新中納言知盛の卿は重き鎧を二つきて海の底に沈みたまふ。能登守教經どのは敵の強者ふたりを左右に引つ抱へておなじく浪の底に入りたまふ。海は血潮のからくれなる……。

阿波。

あゝ、これ、景清。その時のおそろしさを再び見るやうな、そのやうな話はもう止めたがよい。

景清。

その御一門の修羅の魂魄は今も浪の底にとまつて、雨の夜、風のゆふべには男女の泣き叫ぶ悲しい聲も聞ゆるでござらう。鬼火もさだめて飛ぶてござらう。

唐橋。

あれ、又そのやうなおそろしいことを……。(行盛にすがる。)

景清。

それを思へば景清は片時もかうしてはゐられませぬ。(いよく激して。)この恨みは……この恨みは……なんとすることも忘らるゝことではござらぬ。あらゆる恨み、あらゆる呪ひに、

わが身は燃ゆるばかりでござるわ。

教盛。

それは執着の浅ましきぢや。

景清。

その執着があればこそ、景清は今まで生きてゐたのでござる。教盛の卿、經房の卿はもはや老人ぢや。兎やかうと遊つてゐらるゝも是非がござらぬ。忠經の卿、師盛の卿はまだお若い、さだめて景清と御同意でござらうな。

忠經。

いや、今となつては仇もない。恨みもない。むかしは昔とあきらめて、新しい生涯を拓くがわれくの望みぢや。

師盛。

そちも潔よく執着の根を断つて、こゝに一生を送る覺悟をしたがよいぞ。

教盛。

さうぢや。かう云へばとてあながちに卑怯でない。われくもこの山奥にかくれ住んで、毎日おこたらず働いてゐれば、小豆もある、稗粟のたぐひもある。一年中の食料には事かかぬ。

經房。

浦の苦屋とは違つて、四季をりくに花もあり、もみぢもある。命を支へ、心をなぐさむるにはそれで十分ぢや。

行盛。

ましてこゝにゐる人々はいづれも一族一門ばかりで、不和もあるまい、いさかひもあるま

教盛。平家再興の望も捨て、慾もすて、こゝで安らげき生涯をいとなむが、却つて幸ひと云ふものぢや。

阿波。ほんに軍にはもう飽きました。

八條。たとひ綺羅を飾らずとも、手織の麻を身につけて。

唐橋。暑さ寒さを凌げばそれでよいと思つて居ります。

景清。(憤然として嘆息する。) もうこの上は是非もござらぬ。方々は方々のお心まかせぢや。景清一人は下山いたす。(たち上る。)

一同。(顔を見あはせる。)

忠經。景清、待ちや。お身ひとり下山してなんとするのぢや。

師盛。こゝろばかり燥つても一人で旗揚げはなるまいぞ。

景清。勿論ひとりで旗あげはなりません。ひとりならば一人で出来るやうなことをして見せます。

行盛。諄くも申すやうなれど、あの女子とても一人で望みを遂げました。

して、お身がひとりで出来ることゝは……。

景清。これより鎌倉へ赴いて、頼朝を狙ひ討にいたします。

一同。(再びおどろく。)

景清。所詮景清は方々のやうに、うき世を捨て、生きてゐらるゝ男ではござりませぬ。執着の根を断つなどとは思ひもよらぬこと、おのれ一人でも世のなかに打つて出で、きつと思ひを遂げます。

經房。さりとは勇ましい覺悟ぢやが、今は源氏の世盛りであらうに、お身ひとりで頼朝を狙ひ撃

にせうなどとは、石を抱いて淵に望むよりも危いことぢや。首尾よく参ればよいがなう。

景清。成るとならぬは時の運、頼朝を討つか、頼朝に討たるゝか、二つに一つのほかはござらぬ。萬一仕損じて捕はれの身となるも、この隠れ家のことなどは決して口走る景清ではござりませぬ。たとひ火水の拷問を受けても、誓つて白状はつかまつらぬ。その儀は御安心くださりませ。

教盛。お身の氣性は我々もかねて好う知つてゐる。今さら止めても止まるまい。

行盛。心まかせに下山いたせ。

教盛。われゝに取つてはこゝが極樂ぢや。

景清。景清のゆく手は地獄ぢや。はゝゝゝ。

(下のかたより景光と重家出づ。)

景光。あれにて竊かにうけたまはれば、鎌倉へ御發足のおほし立、お勇ましう存じまする。

重家。なにとぞ我々兩人にもお供仰せつけられて下さりませ。

景清。いや、この場合に一人ふたりの味方はあつても無うても同じことぢや。そち達はこゝにと

どまつて方々に御奉公申せ。もし萬一のこともあらば、景清に代つて敵をふせけ。これは

形見として次郎につかはすぞ。(長巻を遣る。)

景光。はあ、ありがたう存じまする。しかしこの打物を下されましては、お前様がまさかの時

に……。

景清。(わが太刀を叩く。)家重代の悲丸、これさへあれば仔細はない。十郎。

重家。はあ。

景清。姿をやつすに物の具は不用ぢや。景清の鎧はそちにつかはすぞ。

重家。ありがたう存じまする。

景清。思ひ立つ日が吉日ぢや。すぐにこれより發足の用意をいたさう。方々、御免くだされ。

(景清は上のかたに去る。景光と重家も附いてゆく。舞臺暗くなる。)

阿波。おゝ、月がまた隠れました。

八條。折々雲にかくるゝは此頃の夜の習。

唐橋。やがて又晴れゆくでござりませう。

經房。併しこの山へ分け入るときには、逃ぐるもの路を選ばぬ譬で、あてども無しにまよひ込み

しが、いざ下山いたすとなつたら、暗さは暗し、路は無し、景清もさだめて難儀であらう

な。

(準太と乙音は前の方にすゝみ出づ。)

準太。恐れながらお願ひがござります。

教盛。なんぢや。

準太。景清様の御案内はわたくしどもに仰せ付けられて下さりませ。

教盛。なるほど、これは屈竟の道しるべぢや。そち達は景清の案内してゆけ。

準太。はあ。

教盛。景清を無事に麓まで送り出したら、再びこゝへは戻るまいな。

景清

三五三



隼太。

え。(乙音と顔を見あはせる。)

教盛。

(思案して)お、それも道理ぢや。一生里へは歸すまいと思つたれど、乙音とやらが身ひとつで、深山の奥までたづね來し、女心のあはれさに、ゆるして歸す。勝手にゆけ。

二人。

え。

教盛。

但しこの隠れ家のあることをかならず人に洩すまいぞ。

隼太。

決して他言はいたしませぬ。

乙音。

憚りながら御安心下さりませ。

經房。

一生人には語るなよ。くれぐれも頼んだぞ。

二人。

はあ。

教盛。

では、早う支度をいたせ。

二人。

はあ。(地にひれ伏す。)

乙音。

(よろこぶ)隼太どの。わたし等ふたりは再び家へ歸れるのぢや。

隼太。

ほんに思へば夢のやうぢや。

乙音。

こんな嬉しいことはござらぬ。さあ、さあ、早う。(隼太を急ぎ立て、奥に入る。)

忠經。

歸して遣ると申したら。

師盛。

あのやうに喜んで行きました。

教盛。

彼等もうき世に未練があるのぢや。(さびしく笑ふ。)

(月再び明るくなる。行盛はまた笛を吹く。)

(11)

おなじく牛腹。おなじ夜の更けし頃。

峨々たる岩石の山路にて、上のかたの高きところより斜めて下のかたに降り來りて、更に下のかたより中央のや、平かなるところへ迂回して出づる坂路あり。左右に大小の岩石多く、岩の根には熊笹または芒など生ひたり。その他は一面の紅葉にて、月のひかり明るく照せり。木笈の音遠くきこゆ。

(高き坂路の上より隼太が先に立ち、つゞいて景清は旅姿、そのあとより乙音もついて出づ。三人

景

清

はあやふき路をたどり来る。

準太。もし、そこには谷がござりますぞ。

景清。よい、よい。登る時には左ほどとも思はざりしが、随分険しい坂路ぢやなう。

乙音。それでも月が明るいで、どのくらゐ仕合せだか知れませぬ。

準太。これで闇なら一足もあるかれまい。乙音も氣をつけて来や。

乙音。あい、あい。

(三人は中央の平かなるところに降りて来る。)

景清。兩人ともに案内大儀であつた。まだこれから麓までは餘ほどの路程があるかな。

準太。いえ、こゝまでが難儀のところ、これから先は一筋道、まつすぐにゆけば自然に麓まで

まゐられます。

乙音。もうこれから先はおよそ四里か五里でござりませう。晝間ならばこの森のあひだから麓の

里も遠く見えます。

景清。おゝ、左様か。(思案する。)そち 景清と一緒に麓の里へ出るのぢやな。

準太。はい。

景清。これから再び山へ引返してはどうぢや。里に住むよりは却つて安樂であらうに……。

準太。仰せではござりますが、折角おゆるしが出ましたからは、やつぱり里へ歸りたうござりま

す。

乙音。さつきお許しの出ました時には、飛び立つやうに嬉しうござりました。

景清。どうしても里へ歸りたいか。

二人。はい。

(景清すこしく思案してたゝすむ。)

準太。(先を急ぐこゝろにて。)さあ、お越しくださりませ。

(先に立ちてゆきかゝる時、景清はたちまちに太刀をぬきて、うしろより準太を切倒す。)

乙音。あれ。(乙音はおどろきて準太のそばへ駆け寄るを、景清はこれも一刀に切倒す。ふたりは打重なりて倒

る。)

景清。(血刀を月に照しみる。)いまだ仇の血を見ぬうちに、あたり二人の血を染めた。(死骸にむかひ

て。)こりや、よう聞け。迂濶に里へ歸し遣つて、萬一おのれらの口から隠れ家が世間に洩

れては方々の大事。また二つには景清が竊かに鎌倉へ赴くことを、敵に覺られたらなんと  
ならう。かうして口を塞ぐが後日のためぢや。不便ながら是非もないわ。  
(太刀を鞘に収めてゆきかゝる。山風の音。)

—幕—

三巴雪夜話

大正五年十月作。

大正五年十二月。帝國劇場初演。

初演當時の主なる役割——横網の吉五郎、尾上松助、黒鉄の三次（市川左團次）  
歌澤おもん（澤村源之助）手代半七（片岡我童）娘お花（市川松蔭）船頭伊之助  
（市川壽美藏）番頭金助（市川市十郎）馬士六藏（市川左升）百姓五八（市川荒  
次郎）など。

登場人物——横網の吉五郎、黒鉄の三次、哥澤おもん、刀屋の手代半七、刀屋のむすめ  
お花、刀屋の乳母お竹、刀屋の番頭十兵衛、船頭伊之助、寅松、同心大橋彌太郎、江戸屋  
の番頭金助、馬士六藏、百姓五八、長作、彌十、ほかに茶屋娘、駕籠夫、船頭、若い者、  
捕手、参詣人など。

## 第一幕

(1)

この脚本は在來の所謂「一番目物」の形式に據りたるものなれば、上演の場合には、俳優の演出法は勿論、鳴り物、衣裳、道具のたぐひに至るまで、すべて其心にてあるべきこと。

東海道、川崎宿。立揚茶屋の奥座敷。本舞臺三間常足の二重、本縁つき、縁は上のかたに折り廻して廊下つゞきの心の正面には古風なる床の間。つゞいて出入りの襖、下の方は茶壁。庭には飛石紅葉の立木などよろしく、杳ぬぎの石には男と女との草履がそろへてあり。下のかたには障子をしまれたる二階家。その裾は竹垣にて、枯れ残りたる菊など咲けり。  
〔江戸時代の末期、十月下旬の午すぎる頃。暮あくつと、下のかたの二階家の障子をあげ、清元連中居ならびて、すぐに清元の淨瑠璃になる。〕

清 川崎や、大師が筆の假名で書く、いろはこの世の始めにて、光明 眞言眞實の、戀と利益に四つの手を、あはせて頼む二人連れ。

〔奥の襖をわけて、刀屋の手代半七、十八九歳。刀屋の娘お花、十六七歳。忍び足にて出づ。お花は手に水晶の珠数を持つ。〕

清 落葉忙しき冬の日の、ひろも九つ半七が、お花とこゝで約束の、あふ瀬果敢なく急がれて、かたみに絞る袖が浦。

〔二人は立つたるまゝにて四邊をうかゞふ。〕

お花さま。

半七。お花はまた戻らぬのであらうか。

半七。六郷の親類まで行つて来れば、かなりに暇が取れるとか申して居りました。兎もかくも乳母さんが戻つてまるるまで、しばらくこゝにお待ちなされませ。

お花。そなたも一緒に待つてゐてたもるか。

半七。さあ、お前様は大師まり、乳母も一緒のござりますれば、些とぐらゐお戻りが遅くなりまして、別にむづかしいこともござりますまいが、わたくしは目黒の御屋敷まで御用があると申して出て、あまりに歸りが遅くなりましたは……と云つて、お前様ひとりをごへ残して置いては……。ほんにあの乳母さんも早く戻つて来て呉れ、ばよいに……どこに何をしてゐるやら。

清 さりとは無理な我儘な。話の邪魔とどこやらへ、はづしてくれたを恩に被て、今まで拜んでゐたものを。

〔半七は草履を突っかけて庭に降り立ち、下のかたを見に行かうとする。お花も庭に降りて、半七の袂をとらへて縁の方へひき戻す。〕

半七。その乳母さんの蔭口を、なんの斯のと云ひましては、あまりと云へばあまりの身勝手。ちと嗜んだがよいわいの。したが、半七。そなたは乳母が些とも早く歸つて来るやうにと

半七。

先刻から祈つてゐたのであらうが……。いや、さうぢや、さうぢや。ふだんから妾をうるさがつてゐることは、そなたの顔にちやんと見えてゐる。はて、なにをおつしやる。大切な御主人様の御恩にそむくと知りながら、内外の者の眼を忍んで、かうしてお逢ひ申すのが、なみ大抵のことではなませうか。少しはお察しなされませ。

お花。

そりやわたしとても同じこと、ひとつ店で朝夕に、顔を見あはせてゐながらも、しみぐと物も云ひかはされず。江戸から遠い川崎の大師詣りをかこつけに……。〔珠数を見せる。〕たま〜逢ふを樂みとは、焦つたいやら果敢ないやら。はて、そこがたがひの辛抱でござります。

半七。

その辛抱は大抵なことではない。さつきもこゝへ來る道で、あの鈴ヶ森を通つた時に、わたしは思はず涙がこぼれた。

お花。

え、あの鈴ヶ森をお通りなされて……。

半七。

お、泣いたが無理か。

清

いたづらの、うき名は江戸にかくれなき、八百屋お七や白木屋の、お駒もみんな酷らし

い、義理と情のしがらみに、堰かれ責められ隔てられ、この世からなる火の車、劍の山へのほりしと、噂にのこる鈴ヶ森。それを思へばわたしとて、磯うつ波のぬれた同士、身につまされて涙ぐむ。

〔お花は持つてゐる珠数をつかひ、半七を捉へて口説模様よろしくある。〕

半七。

え、もうそのやうな縁起でもないこと仰しやりますな。お七やお駒は昔のこと。

お花。

いや、いや、今もむかしも變りはない。そなたとわたしが添はれぬときは……。

半七。

その時には又分別。

お花。

その分別が今聞きたい。〔すり寄る。〕

半七。

いづれゆる〜と考へまして……。

お花。

それ、そのやうに上の空。〔珠数にて打たうとする。〕

半七。

さりとは御無理な。

お花。

なにが無理ぢや。〔また詰めよる。〕

半七。

はて、むづかしい。では、眞平御免くださりませ。

お花。

〔いよく拗れる。〕いや、堪忍はならぬ、ならぬ。

清 又ふりあぐる珠数の緒の、ふつと切れてはらくと、つらぬき止めぬ玉ぞ散る。これも何かのしるしかと、ふたりは俄に興さめて、しばし詞もなかりけり。

(お花は再び半七を打たうとし、半七は避けようとして珠数の端をつかみ、たがひに引き合ふはずみに、珠数の緒は切れる。ふたりは氣にかゝる思入にて顔を見あはせる。下の方より庭傳ひに乳母お竹は竊と出て来る。)

お竹。 どうも遅くなりました。

(ふたりは心づいて左右に離れる。)

半七。 お、乳母さん。今お戻りでござりましたか。

お竹。 (お花の手にしたる珠数に眼をつける。) お、珠数の緒が切れましたか。

お花。 なんぞの悪い知らせではあるまいか。

お竹。 さあ。(云ひかけて氣をかへ。) よもやそんなことでもござりますまい。

お花。 でも、氣にかゝる。(切れたる珠数を疊に打ちつける道具替りの知らせ。) なう、半七。

清 眞垣の菊も影瘦せて、霜になやむぞ。

(お花は再び半七にすり寄り寄り顔を見あはせる。お竹は勿體ないといふ思入にて、落ちたる珠数を拾

ひて押しいたゞく。時の鐘、清元の三重にて、この道具廻る。

(11)

おなじ立場茶屋の店さき。

本舞臺四間。常足の二重。前づらより下手へ折りまはして、三尺ぐらゐの土間になつてゐる。二重の正面。上のかたに鼠壁、つゞいて出入りの襖、軒口には大師講などと染めたる納め手拭を澤山にかけ、下手の柱には御料理江戸屋と記したる行燈をかける。二重の下のかたには少しあへと下げて藁葺の門。門の中は庭のこゝろにて植こみなどよろしく、店の前には幅廣の床几二脚を据ゑてあり。(店さきには駕籠を一挺おろし、江戸の駕籠昇萬吉、千太のふたり床几に腰をかけて茶をのんでゐる。茶屋娘お留、お秋のふたりは門口に立つてゐる。この見得よろしく驛路入りの馬士唄にて道具留まる。大師詣りの仕出し、男、女、娘など思ひくしのこしらへにて上下より出で、すれ違ひて通る。)

お留。 おかけなさいまし。  
お秋。 お休みなさいまし。

お留。寄つていらつしやいまし。

(ふたりは客を呼んでゐる。仕出しは通り過ぎる。)

お留。お秋さん。けふは些ともお客の足が止まらないねえ。

萬吉。そりやあ當りまへさ。きのふの廿一日をよけて、けふお詣りに来るやうなお客様なもの、

どうで錢を落して行く筈はねえや。

お秋。でも御命日は込むと云つて、わざ／＼よけてお詣りに来る方も随分ありますから、さう一

概にも云はれませんよ。

千太。ときに奥のお客様はまだ支度が済まねえのかしら。随分さつきから待たせるぜ。

萬吉。と云つて、こつちから催促にも行かれめえ。まあ、ゆつくり煙草にでもしようか。

(駕籠身ふたりは煙草を呑んでゐる。下手の門の中よりお花は半七と連れ立ち出て出る。あとより乳母

お竹も出づ。)

半七。わたくしはもうこれでお別れ申します。

お花。どうでも大師様までは一緒にゆかねと云やるか。

半七。くどくも申す通り、目黒のお屋敷までと申して、お店を出てまゐりましたのでござります

お花。れば、あまりに歸りが遅くなりましたしては、おかみさんの手前もあり、番頭さんにも叱られます。お前様は乳母さんとお二人で、ゆる／＼御參詣をなされませ。

大師様へお詣りはほんのかこつけ。そなたが江戸へ歸るならば、わたしも一緒に歸らうわいの。

半七。はて、そのやうな不信心では、大師様の罰があたりませう。

お花。神様の罰があたつても、佛様の罰があたつても大事な。わたしはそなたと一緒にゆきた

い。

(お花は寄添はうとするを、お竹は隔てる。)

お竹。はて、来る時も別々。歸るときも別々。それでなければ人目に立つて、お二人の爲になり

ませぬ。

お花。ぢやと云うて。

お竹。はて、人が見て居ります。

(お竹は駕籠身や茶屋女に思入。駕籠身どもはわざと顔をそむけてゐる。)

お竹。さあ、半七どのには日の高いうちに。

三巴雪夜話



半七。では、お先へまゐります。およ、若い衆さん。どうも待たせました。  
 萬吉。どういたしまして。  
 千太。ほかの奴等は隣に待つてゐますから。  
 萬吉。すぐに呼んでまゐります。

(ふたりは行きかゝる。)

半七。いえ、いえ、ほかの人達を呼ぶには及ばぬ。わたしだけは江戸へ歸ります。  
 萬吉。ぢやあ御參詣をなさらずに、すぐに江戸へお歸りなさるか。  
 千太。それで判つた。  
 半七。え。

千太。いえ、なに、よく判りました。ぢやあ棒組、すぐに江戸へ引返すとしようぜ。  
 萬吉。さあ、お乗んなせえまし。

(駕籠に乗る。)

半七。では、お嬢様。  
 お花。わたしを置去りにして歸るのか。おほえてゐや。

(お花は又寄らうとするを、お竹は隔てる。)

お竹。では、半七どの。

半七。お嬢様を頼みましたぞ。

(半七は駕籠に乗りて下手に入る。お花はあとを見送る。)

お留。もうお立ちでござりますか。

お竹。いつまでも御邪魔をしました。

お秋。若い衆さんは隣に待つて居りますから、ちよつと呼んでまゐりませうか。

お竹。それは御苦勞でござりますな。

(お秋は上手に入る。)

お留。お駕籠のまゐるまで、まあお掛けなされませ。

(お竹とお花は床几にかける。お留は茶を汲んで来る。)

お留。お茶一つおあがりなされませ。

お竹。いえ、もう澤山に頂きました。

(上手よりお秋を先に駕籠昇四人出る。)

駕甲。どうもお待たせ申しました。

お竹。これから大師様へ御参詣をしますから、なるだけ急いで頼みます。

駕乙。へい、へい。駕籠はあそこに揃つて居りますから、どうぞお早くお乗りください。

お竹。では、お嬢様。

お花。あい。

お竹。いろく御厄介になりました。

お留。毎度ありがたうござります。

お秋。お竹とお花は駕籠昇四人と一緒に上手へ行きかゝる。上手より黒鍬の三次、三十歳位、月代のあ

る鬘、武士の旅姿にて笠を持ち出で出る。つゞいて歌澤おもん、廿七八歳、武家の女房のこしらへ、

矢はり旅姿にて出で、お花とすれ違ひて、三次はちつと見送る。お花お竹は上手に入る。

三次。江戸者らしいが、好い娘だな。

おもん。ありやあ御成道の刀屋の娘でお花と云ふんだよ。

三次。よく知つてゐるな。

おもん。あの店にはわたしの弟の半七が奉公してゐるから、それで知つてゐるのさ。今もあのばあ

やに顔を見られやあしないかと思つて、なるだけ傍の方を向いて摺れ違つたんだよ。

三次。斯ういふなりをしてゐるちやあ大抵の者は氣がつくめえ。

お留。おかけなさいまし。

お秋。寄つていらつしやいまし。

三次。さうくしいな。どうで休まうと思つてゐるのだ。(詞をあらためて。)これ、女房。

おもん。(おなじく詞をあらためて。)はい。

三次。暫時休息いたしてまるらうではないか。

おもん。それが宜しうござりませう。

三次。これ、床几を借りるぞ。

お留。いらつしやいまし、よい鹽梅に御天氣で結構でござります。

三次。天氣がつかくと道中も大分樂だなう。

(お留とお秋は茶を汲んで出る。三次とおもんは茶をのんでゐる。上のかたより鶴見の六蔵、馬士

のこしらへにて出る。)

六蔵。やあ、いゝ天氣になつたでねえか。

お秋。おや、六蔵さん。まあ一服呑んでおいでなさい。

(六藏は二重の口に腰をかけて煙草をのんでゐる。奥より番頭金助出づ。)

金助。おゝ、六藏さん、久しく見えなかつたね。(挨拶して。)お客様、いらつしやいまし。(三次にも挨拶する。)

三次。今も申して居つたところだが、道中をいたす者には天氣がなによりだ。

金助。旦那様はこれからお下りてござりますか。

三次。三島の宿の親戚をたづねて、これから江戸へ歸る途中だ。

金助。お詞の御様子はどうも江戸に相違ないと存じて居りました。まだ日が高うござりますから、これからお拾ひでも樂に江戸へ這入られます。

おもん。もし、あなた。今のことをごの番頭さんにお話しなされては如何でござります。

三次。おゝ、さうであつた。これ、番頭。

金助。はい、はい。

三次。實はこれへまるる途中で、拙者は金を拾つたのだ。

金助。へえ、金をお拾ひなされましたか。

(金助は思はず草履をはきて店さきに出る。六藏も立ち上つて聴く。)

三次。こゝからおよそ四五町も手前であつたかなう。

おもん。そんなものでござりませう。あの松並木から一町ほども來かゝつた路の端でござりました。

金助。して、いくらほどお拾ひになりました。

三次。金百兩だ。

金助。え、百兩……。

六藏。大變な拾ひ物をしたもんだ。

三次。拾つた金はこれだ。(ふところから封金を出す) 表には御年貢金と記して封印がしてある。

金助。(のぞく)なるほど御年貢金に相違ござりませぬ。この近所に落ちてゐたのを見ますと、

いづれ近村の者が取落したのでござりませう。

三次。拙者もさやうに存ずる。因つて、其方達に相談するのだ。おとし主はさだめて難澁してゐることであらう。

おもん。どうかしてその落し主を探し出して、早く安心させて遣りたいものでござりますな。

三次。そち達は土地の者だ。なにか心當りはないか。

金助。さあ。(かんがへる)これ、六藏さん。お前なにかそんな話を聞いたことはないか。

六藏。

さあ。(これもかんがへる。) 探したら知れねえこともあるめえが……。

(金助と六藏は顔を見あはせる。)

金助。

唯今もお聞きの通り、いづれ近村の者でござりませうから、探して知れぬことはござりませう。心當りを聞き合はせまするまで暫くお待ち下さりますまいか。

三次。

あまりに手間取つては迷惑だが……。お、丁度時分だ。そんなら奥で晝食をしたゝめながら待つてゐると致さうか。

おもん。

それがよろしうござりませう。

金助。

では、さうお願い申します。これ、おふたり様を御案内申せ。

お秋留。

はい、はい。さあ、こちらへお通り下さりませ。

六藏。

(ふたりは案内して三次とおもんを下手の門のなかへ連れてゆく。)

金助。

番頭さん、お前は悪い人だね。

六藏。

なに、悪い人だと……。

六藏。

好い加減な落し主をこしらへて、あの百兩の金をまきあげようと云ふ料簡が、ちやんとお前の顔に書いてあるだ。

金助。

叱、大きな聲をするなよ。

(下のかたより生麥の五八、百姓の拵へにて出づ。)

六藏。

眼の寄るところへ玉とか云つて、丁度いゝ相棒がひとり來たぞ。どうだ、番頭さん。この

金助。

五八を落し主に仕立てちやあ……。

五八。

なるほど、五八なら打つて付けだな。

金助。

なんだ、なんだ。おれに打つて付けの役があるかね。

金助。

もうかうなつたら仕方がない。金は三人が山分けとして、いゝか、五八が落し主、六藏が

証人……。

いや、証人はもう二三人ほしいな。

六藏。

そんなことは譯はねえ。二兩か三兩も遣るといへば、おれの仲間がすぐに來る。

五八。

一體そりやあどんな相談だね。

(五八が進みよれば、金助はさゝやく。上のかたより横綱の吉五郎、網船宿の亭主、大師詣りの歸りにて篋につけたる達摩を持ち出て出づ。)

吉五郎。

どうも今のはあの二人に相違ねえが……。(店さきへ來る。) おい、お午の支度は出來るかね。

吉五郎。

(これにて三人びつくりして飛び退く。)